八尾市文化財調査報告５６
平成１８年度国庫補助　高安古墳群等調査事業

高安古墳群　分布・測量調査報告書

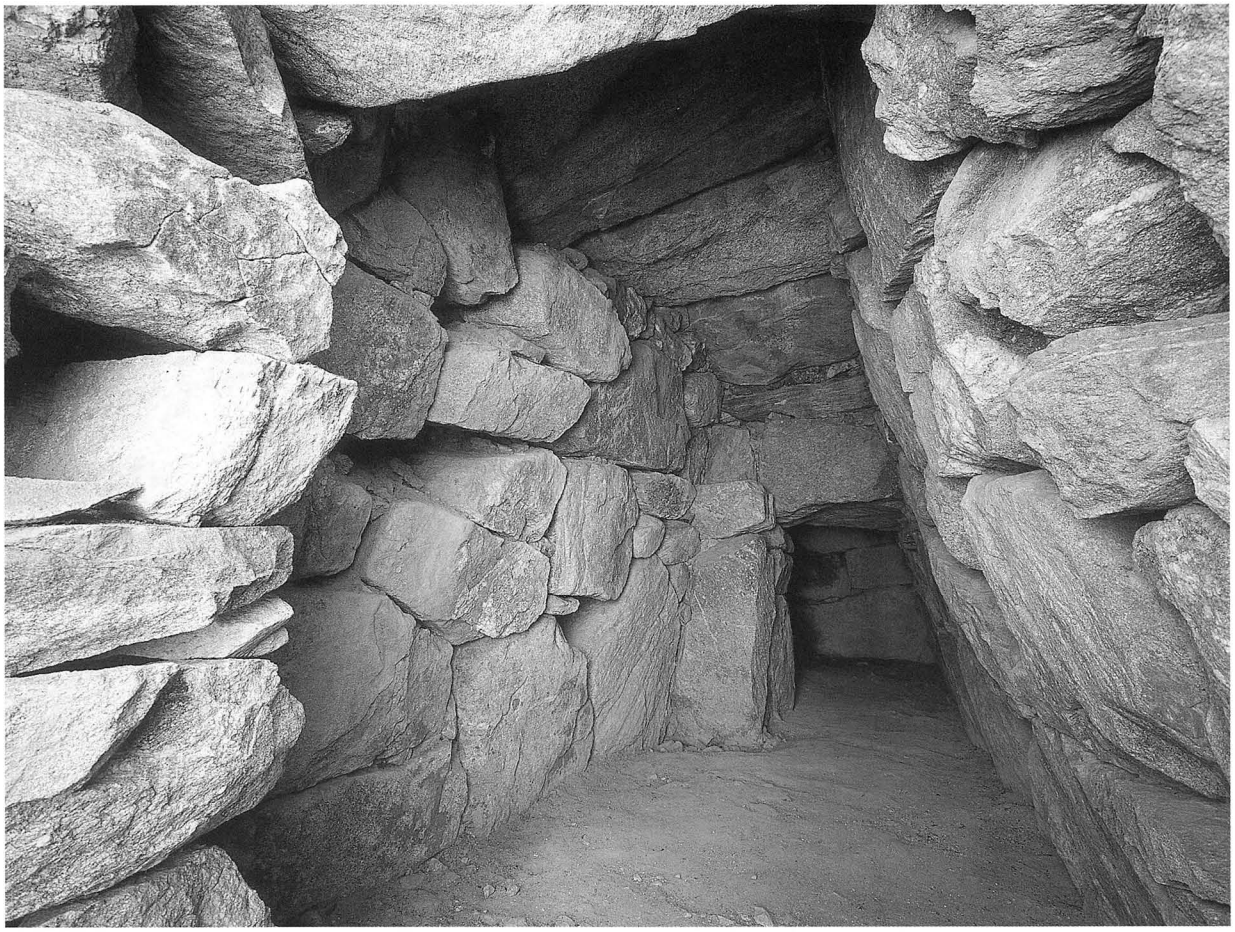
大窪・山畑南地区詳細分布調査

市史跡・二室塚古墳測量等調査　他

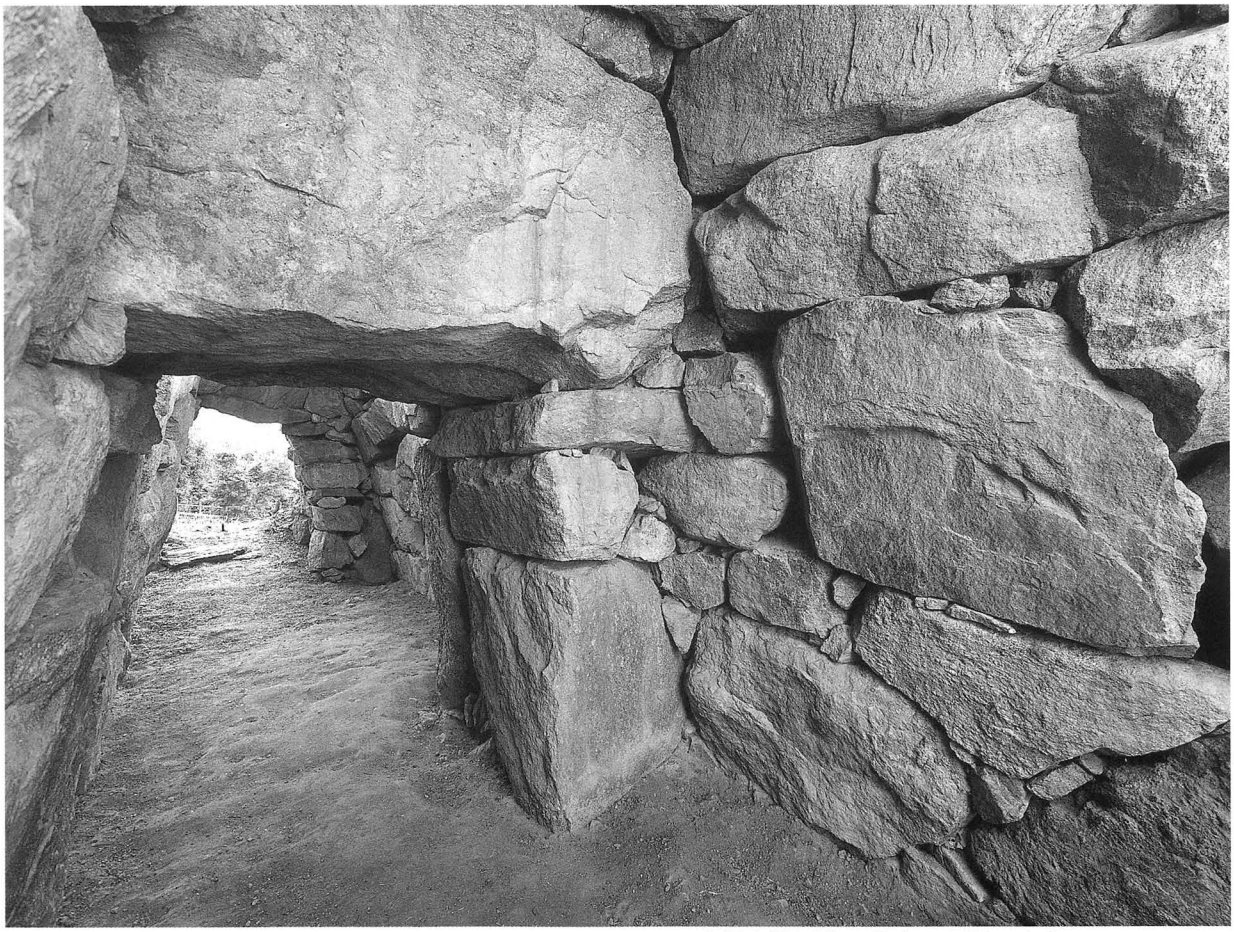
２００７年3月
八尾市教育委員会

八尾市文化財報告56正誤表

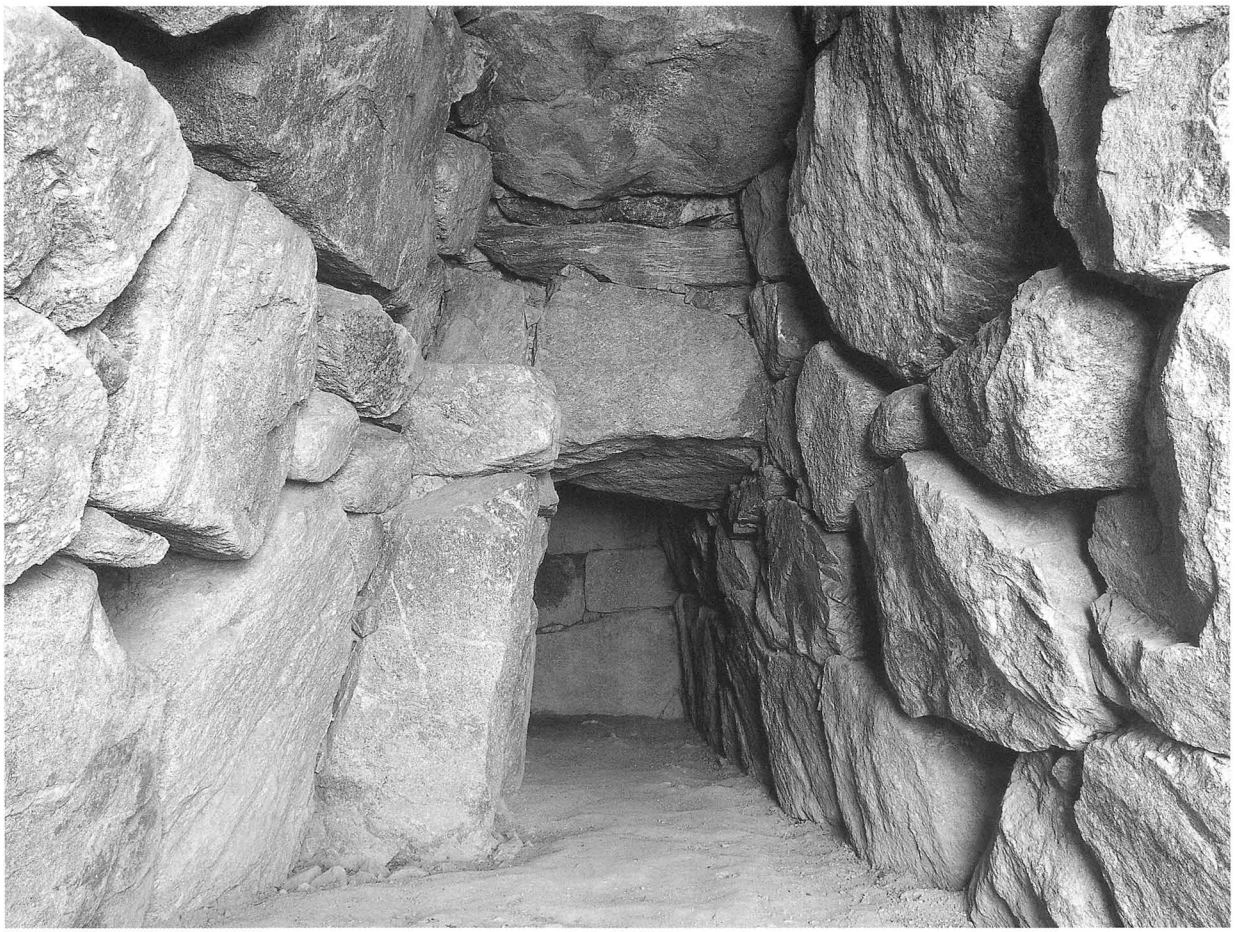
頁	行	誤	正
例言	25	松尾信一が	松江信一が
例言	27	松尾信一が	松江信一が
22	35	(1819)に	(1891)に



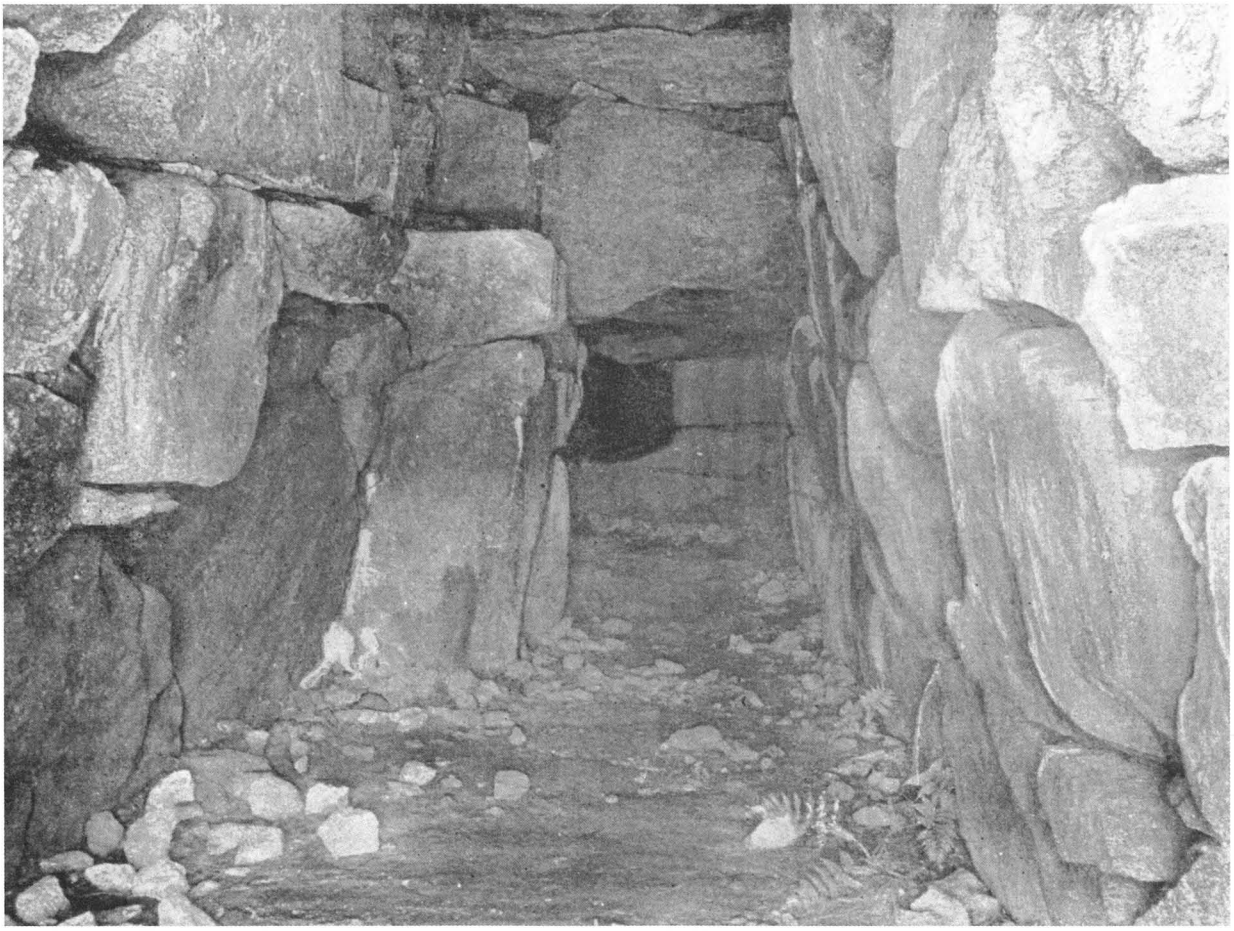
二室塚古墳石室　羨道から石室内部（撮影　阿南辰秀 氏）



二室塚古墳石室　後室から開口方向（撮影　阿南辰秀 氏）

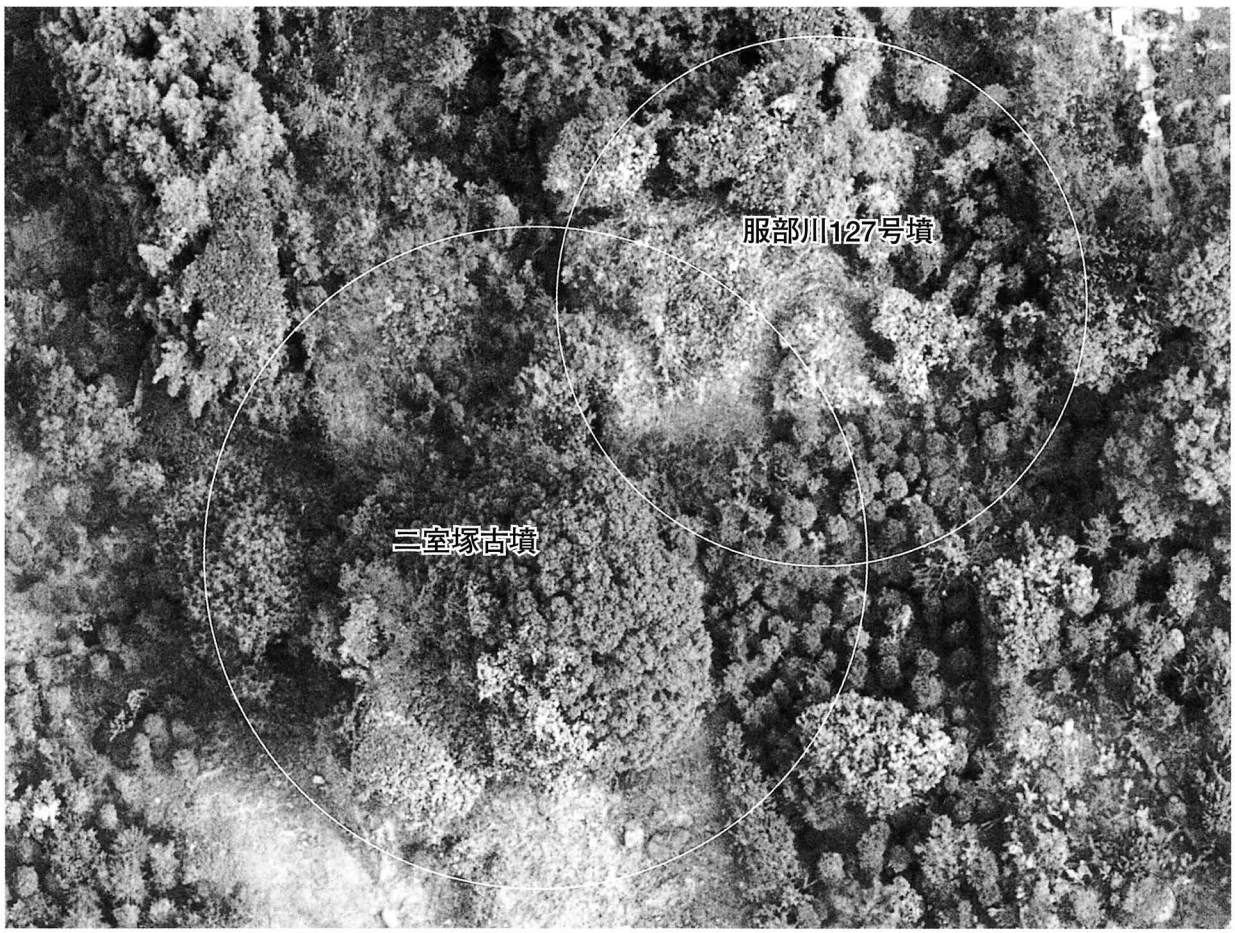


二室塚古墳石室　前室から後室（撮影　阿南辰秀 氏）



ロマイン・ヒッチコックが1887～88年頃撮影した二室塚古墳石室（ロマイン・ヒッチコック1891「日本の古墳」より転載）

二室塚古墳墳丘　南東より（撮影　阿南辰秀 氏）



二室塚古墳・服部川127号墳　航空写真（撮影　（株）相互技研）

はじめに

八尾市の東側を画する生駒山麓には、高安古墳群をはじめとして、300基近くの古墳が残されております。古代の豪族の墓域として、まさに、古墳の宝庫ともいえる地域であります。八尾市教育委員会では、平成15年度から、これら、高安古墳群をはじめとする山麓の貴重な文化財である古墳について、広く市民に親しんでいただける場となるよう、保存調査を進めてまいりました。平成16年・17年度は、大森貝塚を発見した米国人の博物学者、エドワード・S・モースが調査した高安古墳群内の開山塚古墳（かいざんづかこふん）と周辺４基の古墳を、市指定史跡といたしました。

本年度は、「日本考古学の父」といわれる英国人ウィリアム・ガウランドが、明治時代に、「双室（そうしつ）ドルメン」として、海外に紹介した服部川の二室塚古墳（にしつづかこふん）の調査を行い、平成18年度の市指定史跡といたしました。また、高安古墳群の大窪・山畑南地区の詳細分布調査が、本年度で終了しました。本書は、これらの調査の成果をとりまとめたものです。

また、昨年度より「高安古墳群と山麓の古墳保存・調査計画検討会議」を設置し、専門の先生方や行政担当者の方々に、今後の保存計画等について、貴重なご意見を賜りながら、事業を進めているところであります。

最後になりましたが、今回の調査を行うにあたり、深いご理解とご協力をいただきました関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成19年３月

八尾市教育委員会
教育長　森　　卓

例　　言

1．本書は、八尾市教育委員会が、国庫補助事業（重要遺跡確認・保存目的）で行った高安古墳群の大窪・山畑南地区における詳細分布調査及び服部川に所在する二室塚古墳の墳丘測量調査他の報告である。

2．調査は、八尾市教育委員会文化財課（課長　岸本邦雄）が主体となって行った。

3．二室塚古墳の調査にあたっては、古墳の所有者の方々及び周辺の服部川地区の方々に多大なご協力をいただいた。ここに記して厚くお礼申し上げます。

4．二室塚古墳の調査にあたっては、野洲市教育委員会の花田勝広氏が作成された実測図面を、報告書等で使用させていただいた。また、本報告中の表２の古墳一覧表及び平成17年度報告の表３の服部川地区古墳一覧表における石室の計測値は、石室が一部しか残存していないものを除いては、氏の実測図の計測値を使用させていただいた。貴重な資料を、高安古墳群の保存調査のために、ご提供いただきましたことに、厚くお礼申し上げます。

5．巻頭写真２下のロマイン・ヒッチコック撮影の二室塚古墳石室の写真については、上田宏範氏のご所蔵されている原書から使用させていただいた。氏からは、高安古墳群の学史をはじめとして、平素より、多くのご指導をいただいている。記して厚くお礼申し上げます。

6．詳細分布調査にあたっては、古墳の存在する私有地の立ち入り等について、大窪・山畑地区の方々にご協力をいただいた。また、調査中の駐車場の使用等、大窪の浄土宗来迎寺にご協力いただいた。厚くお礼申し上げます。

7．調査及び調査計画にあたりましては、「高安古墳群と山麓の古墳保存調査計画検討会議」の白石太一郎氏、増渕徹氏、高橋照彦氏、一瀬和夫氏、花田勝広氏、安村俊史氏、若松博恵氏、森屋直樹氏、土屋みずほ氏にご指導をいただいた。また、二室塚古墳の調査と指定について、八尾市文化財保護審議会委員の井藤徹氏のご指導をいただいた。さらに、二室塚古墳の複室構造について、河内長野市教育委員会の太田宏明氏に、ご教示をいただいた。記して、厚くお礼申し上げます。

8．詳細分布調査の現地調査にあたっては、調査補助員として、大西進、松尾信一が参加した。遺物の実測及びトレースは、調査補助員、藤中貴子が行った。台帳整理や古墳一覧表等の内業作業は、松尾信一が行った。

9．二室塚古墳の墳丘測量と航空写真及び石室図面のレベル記入・トレースは、株式会社相互技研に委託した。

10．巻頭の二室塚古墳の墳丘及び石室の写真（巻頭２下を除く）と図版26の写真は、阿南写真工房阿南辰秀氏の撮影である。

11．調査担当及び本書の編集・執筆は、文化財課技師吉田野乃が行った。

12．八尾市教育委員会では、今回の調査成果をもとに、高安古墳群二室塚古墳石室について、平成18年度の八尾市指定史跡として指定した。

本　文　目　次

Ⅰ．高安古墳群（大窪・山畑南地区）詳細分布調査報告…… 1
〈付載１〉大窪・山畑21号墳表面採集の遺物…… 11
〈付載２〉服部川54号墳表面採集の遺物…… 12
〈付載３〉服部川地区で確認した石切場跡の踏査報告…… 13
Ⅱ．高安古墳群　二室塚古墳の測量等の調査報告…… 14

Ⅰ. 高安古墳群（大窪・山畑南地区）詳細分布調査報告

[調査の経緯]

高安古墳群は、八尾市の生駒山麓に分布する６世紀を中心に造営された横穴式石室を主体とする群集墳である。横穴式石室の規模の大きさにおいても国内でも有数の群集墳であり、学史上も著名な古墳群である。このことから八尾市教育委員会では、この高安古墳群について、国指定化を目指した保存計画を策定するため、詳細分布調査を行うこととした。詳細分布調査は、高安古墳群が最も集中する地域である服部川地区について、平成15年度から開始し、平成16年度から文化庁国庫補助事業で調査を行い、平成17年度に服部川地区を終了した。本年度は、服部川地区の北側の大窪・山畑南地区を対象に、詳細分布調査を行った。本市では、山麓全体に分布する後期古墳について、高安古墳群の遺跡名を付しているが、服部川、大窪・山畑地区の南側、郡川の地域に最も古墳が集中し、この地域は、従来から、「高安千塚」とも呼ばれてきた。将来、「高安千塚古墳群」として、新たに遺跡名を付する事も考慮に入れ、詳細分布調査にあたっては、高安古墳群集中地域を先行して、調査している。このため、本年度は、大窪・山畑地区においても、古墳の集中する南側の地区を対象に、詳細分布調査を行った。ただし、大窪・山畑地区において、これまでの八尾市教育委員会の調査で確認されている古墳については、今回の詳細分布調査の範囲から外れているものについても、調査を行った。なお、大窪・山畑55・56号墳については、今回の詳細分布調査の範囲外の既往調査の古墳の確認の際に、これまで確認されていなかった古墳を新たに確認したものである。詳細分布調査の範囲は、第２図に示しており、範囲外の古墳について、番号を入れている。詳細分布調査の範囲の古墳及び古墳状地点については、第３図に示している。

[調査概要]

高安古墳群の研究史については、平成17年度の報告書において紹介したため、ここでは省くが、既往の分布調査によって確認された古墳との照合については、松江信一氏によって照合が行われており（註１）、今回も氏の研究成果に基づいた対照表を、表２に作成した。

今回の詳細分布調査も、昨年度に引き続き、生駒西麓の地域を対象に、地区ごとに古墳番号を付して、網羅的な調査を行った。今回、山麓全体の調査地区割図を作成したので、掲載しておく（第１図）。詳細分布調査はこの地区割図ごとに、古墳番号を付している。今回、調査対象とした大窪・山畑地区は、地区境界線が複雑に入り組んでいるため、二つの地区を合わせて大窪・山畑地区とした。古墳の位置については、1000分の１の地図に古墳の位置を記し、墳丘及び石室の略測図の作成と写真撮影を行い、台帳としてまとめた。また、今後の開発事業等に対応するため、現状を見て古墳である可能性を有する地点については、古墳状地点として、1000分の１の地図に位置を記した上で、台帳作成・写真撮影を行った。なお、地点番号については、地区ごとの番号ではなく、全体での続き番号となっている。

詳細分布調査の現地作業は、平成18年12月19日から平成19年３月７日までの実働18日間で行い、既に確認されている古墳を含め56基の古墳と79地点の古墳状地点を確認した。

最後に、この地区の詳細分布調査を行うなかで、気づいた点について、簡単に記しておきたい。大窪・山畑南地区では、服部川地区のように、植木畑の開墾のため、石室がドルメン状になっているものよりは、大窪・山畑28・45・50・51号墳、古墳状地点157・158・159のように、石室の石材が抜取られた痕跡が多くみられる。また、古墳状地点187のように、付近の石室から石材が抜取られ、石材が集められたかとみられる場所に、矢穴の残る石を確認している。本地区では、後世に古墳の石室石材が意図的に抜取られ利用されることが、比較的多かったものものとみられる。

註1 松江信一1998年「高安古墳群分布番号対照表」（八尾市立歴史民俗資料館版）高安城を探る会

表２　高安古墳群　大窪・山畑南地区古墳一覧表

番号	古墳名	墳丘			石室								保存状況
		形状	法量（単位:m）		形式	法量（現存部での法量・単位:m）						開口方向	
			墳丘径（現存径）	墳丘高（現存高）		石室長	玄室			羨道			
							長	幅	高	長	幅	高		
窪山１	日宝寺墓地４号墳	円墳	18.0	5.5	右片袖	7.5	4.2	2.5	2.3	3.2	1.7	2.2	S-46°-W	非常に良好
窪山２	日宝寺墓地３号墳	円墳	12.0	4.8	右片袖	4.8	3.7	1.9	1.6	1.1	1.0	0.7	S-20°-W	良　好
窪山３	来迎寺北古墳	円墳	20.0（推定）	2.3	未開口のため不明									良　好
窪山４		円墳	16.0（推定）	4.0	不　明								南か?	半　壊
窪山５	来迎寺塚古墳・抜塚	円墳	13.6（推定）	2.8	不　明	3.5	3.5	1.65	1.3	不　明			S-30°-W	半　壊
窪山６		円墳	14.1	3.9	右片袖	7.2	4.0	1.65	2.3	3.3	1.2	1.4	S-40°-W	半　壊
窪山７		円墳	推23.5	5.8	右片袖	15.0前後（推定）	6.0前後（推定）	3.0前後（推定）	不明	6.6	2.2	2.0	S-70°-W	やや良好
窪山８		円墳	13.0	3.6	右片袖	6.4	4.5	1.65	2.2	2.1	1.2	1.3	S-60°-W	半　壊
窪山９		円墳	13.8	4.3	右片袖	不　明		2.0	3.15	不明	0.97	1.25	S-20°-Wか	良　好
窪山10		円墳	13.9	4.4	右片袖	8.2	3.9	1.82	3.1	4.0	1.5	1.7	S-60°-W	良　好
窪山11		円墳	15.0	2.9	不　明								不明	非常に良好
窪山12		円墳	18.0	4.3	右片袖	5.6	3.4	2.2	2.5	1.7	1.6	1.3	真西	未調査のため不　明
窪山13		円墳	12.6	3.0	右片袖	5.0	4.1	1.96	2.1	1.0	1.3	1.25	S-40°-W	良　好
窪山14		円墳	不明	不明	不　明								不明	良　好
窪山15		円墳	14.5	不明	未開口のため不明								不明	未調査のため不　明
窪山16		円墳	13.8	3.0	未開口のため不明								不明	未調査のため不　明
窪山17		円墳	10.7	不明	未開口のため不明								不明	未調査のため不　明
窪山18		円墳	不明	不明	不　明	不明	残3.0	2.3	不明	不　明			W-44°-S	未調査のため不　明
窪山19		円墳	18.0	7.7	未開口のため不明								S-80°-W付近か	非常に良好
窪山20		円墳	13.5	4.5	右片袖	6.98	3.8	2.11	2.4	3.18	1.39	0.9	S-40°-W付近	良　好
窪山21		円墳	12.5	6.4	右片袖	6.0	3.35	2.15	3.0	4.55（推定）	1.25	1.2	S-20°-W	良　好
窪山22		円墳	10.8	4.6	右片袖	4.7	3.3	2.1	2.7	1.4	1.45	1.2	S-20°-W	良　好
窪山23		円墳	8.5以上	3.8	不　明	不　明				1.5	1.2	0.7	S-50°-W	半　壊
窪山24		円墳	14.0	4.3	右片袖	9.5（推定）	4.5	1.95	1.9	5.5（推定）	1.4	0.98	S-10°-E	やや良好
窪山25		円墳	11.4	3.9	右片袖	9.2	4.7	1.8	2.4	4.4	1.25	1.4	S-60°-W	良　好
窪山26		円墳	13.8	4.4	不　明	3.2	3.2	1.8	1.8	不　明			S-30°-W	半　壊
窪山27	俊徳丸鏡塚	円墳	15.0	3.8	右片袖	7.0	4.1	2.1	2.6	2.9	1.15	1.5	S-70°-W	良　好
窪山28		円墳	18.0	4.9	不　明	不　明							S-40°-W	半　壊
窪山29		円墳	不明	不明	右片袖	10.1以上	4.6	2.3	1.5	5.5以上	1.4	1.6	S-48°-W	調査後埋没保　存
窪山30		円墳	13.3	4.0	右片袖	7.7	3.7	1.85	2.5	4.0（推定）	1.18	1.0	S-20°-W	良　好

番号	既往調査の古墳番号						古墳の現状・特記事項他	文献番号	既往の測量・実測等調査	第3図での古墳の位置等
	市文化財調査目録（H5～6年）	市古文化財台帳（沢井浩三氏）（S35～38年）	高安城を探る会（S61～H2年）	大阪府教育委員会（S41～43年）	中田遺跡調査会有志他（S48～49年）	白石太一郎氏（S35～37年）				
窪山1	1号墳	21号墳		21号墳	42号墳	2号墳	山林（もとは植木畑）。墳丘、石室とも良好。	(1)	八尾市教委　平成2年度測量調査・花田勝広氏石室実測	3A区
窪山2	2号墳				37号墳		山林（もとは植木畑）。墳丘南側やや削平を受け、東側は擁壁設置。石室は東側の擁壁のため、左側壁が土圧で傾く。玄室が長方形の特徴的な石室。	(1)	八尾市教委　平成2年度測量調査・花田勝広氏石室実測	3A区
窪山3	3号墳				38あるいは39号墳か		山林（もとは植木畑）。平成2年調査時に石室部分破壊され流入土堆積する事判明。調査時に須恵器　土師器出土。ゴミ散乱。	(1)	八尾市教委　平成2年度測量・遺構確認調査	3A区
窪山4	4号墳				40号墳	1号墳?	山林（もとは植木畑）。墳丘西から南にかけて削平。石が露出。平成2年時に須恵器片出土。	(1)	八尾市教委　平成2年度測量・遺構確認調査	3A区
窪山5	5号墳	22号墳	窪7	22号墳	43号墳	3号墳	山林（もとは植木畑）。墳丘は削平により元の形状は不明。石室南半削平のため袖式不明。石室内に二上山系凝灰岩製割り抜き式家形石棺安置。	(2)	S36年、石棺を外に出した際、金環・鉄刀出土。現在石棺は石室内に戻されている。花田勝広氏石室実測	3A区
窪山6	7号墳	25号墳	窪9	25号墳	48号墳		墓地内。墳丘東側削平あり。小型石材を用いた古式の石室。石室内は石材崩落しかかり、土圧によりひずみ、大変危険な状況。		花田勝広氏石室実測	2B区
窪山7	6号墳	24号墳	窪10	24号墳	49号墳	5号墳	墓地内。墳丘は石室羨道部分を中心に遺存。玄室部分は墓地となり、羨道がトンネル状となる。大型石材を使用し、本来は大型石室であったと思われる。		花田勝広氏石室実測	2B区
窪山8	8号墳	23号墳	窪8	23号墳	46号墳	4号墳	墓地内。墳丘上部削平。石室は小型石材を用いた古式の石室。		花田勝広氏石室実測	3B区
窪山9	12号墳	32号墳	窪15		84号墳	27号墳	山林。墳丘西側削平。石室開口部現在埋没するが、沢井氏調査時は開口しており、天井の高いドーム状の玄室で、玄室長より羨道長が長いとされている。石室計測値は沢井氏による。			2B区
窪山10	13号墳	33号墳	窪14		85号墳	28号墳	山林。墳丘、石室ともに良好に遺存。二上山系凝灰岩製石棺材片あり。		花田勝広氏石室実測	2B区
窪山11	11号墳	36号墳	窪24		67号墳	7号墳	私有地内のため今回未調査。巨石のみ確認。			2B区
窪山12	10号墳	37号墳	窪23	中山千塚1号墳	69号墳	9号墳	私有地内のため今回未調査。		花田勝広氏石室実測	2B区
窪山13	9号墳	38号墳	窪22	中山千塚2号墳	70号墳	10号墳	私有地内のため今回未調査。天井石露出。裾の一部が削られた。沢井氏調査時、石棺材片確認。			2B区
窪山14					66号墳		私有地内のため今回未調査。窪山11の南。			2B区
窪山15	25号墳			中山千塚3号墳	88号墳	32号墳	私有地内のため今回未調査。内部は未確認。			2B区
窪山16	24号墳		窪13			33号墳	私有地内のため今回未調査。石材の一部露出。			2B区
窪山17	23号墳				89号墳		私有地内のため今回未調査。石材のみ散在。			2B区
窪山18							擁壁内。玄室基底部の一部のみ残存。（調査後、消滅）	(3)	八尾市教委　平成5年度遺構確認調査調査	1B区
窪山19	22号墳	34号墳	窪12	34号墳	90号墳	34号墳	山林。墳丘周囲削平あり。石室開口部埋没するが、南西付近に閉塞石かと見られる石が埋没している。			2B区
窪山20	21号墳	35号墳	窪11	35号墳	91号墳	35号墳	山林。墳丘西から南にかけて削平あり。石室開口部埋没するが、沢井氏調査時は開口しており、又石棺材片が確認されている。石室計測値は沢井氏による。府調査時も凝灰岩製石棺材片確認とある。			1B区
窪山21	20号墳	31号墳	窪16	31号墳	61号墳	20号墳	山林。墳丘西から南にかけ盛土流出しつつあり、ドーム状の玄室をもつ古式の石室。須恵器片表面採集（今回報告）。府調査時に家形石棺材片確認とある。	(4)(5)	白石太一郎氏石室図作成。花田勝広氏石室実測	3B区
窪山22	19号墳	30号墳	窪17	30号墳	60号墳	19号墳	山林。墳丘周囲削平あり。ドーム状の玄室をもつ古式の石室。羨道開口部天井石、崩落して危険な状況。		花田勝広氏石室実測	3B区
窪山23	17号墳		窪18		78号墳	13号墳	山林。墳丘北側削平。玄室上半が削平され、土が流入し、羨道の一部が確認できる			3B区
窪山24	16号墳		窪20		77号墳	14号墳	山林。羨道南半部失われ、天井石露出するが概して良好。玄室が長方形の特徴的な石室。		花田勝広氏石室実測	3B区
窪山25	90号墳	40号墳	窪5	40号墳	220号墳	37号墳	墳丘周辺やや削平。玄室が長方形の特徴的な石室。沢井氏調査時、石棺材片確認。R・ヒッチコック、外観写真撮影。	(6)	花田勝広氏石室実測	第2図
窪山26	91号墳	39号墳	窪6	39号墳		36号墳	山林。墳丘周囲削平され、玄室前半、羨道欠失。W・ガウランド、立石峠の古墳として石室内写真撮影。	(7)		第2図
窪山27	89号墳	41号墳	窪4	41号墳	221号墳	38号墳	雑種地。墳丘はやや削平があるが、石室ともに良好。沢井氏調査時、石棺材片確認。謡曲や浄瑠璃等の演目にある「俊徳丸」伝承地。歌舞伎役者寄進の焼香台等があり、玄室内に石仏等祠られる。	(8)(9)	八尾市教委　平成14年度測量・試掘調査。沢井氏調査時、石棺材確認。花田勝広氏石室実測	第2図
窪山28					63号墳	30号墳	山林。墳丘中央に石室抜き取りの落ち込みあり。一部石残存。			2B区
窪山29							平成17年度府農道調査時出土。石室は天井石が失われているものの良好に遺存。床面に敷石、仕切り石あり。石室裏込め石等確認。石室内より二上山系凝灰岩製石棺材片、鉄釘・鉄鎹、須恵器出土。	(10)	（財）八尾市文化財調査研究会　平成17年度発掘調査	2B区
窪山30	18号墳	29号墳	窪19	29号墳	79号墳	16号墳	山林。墳丘周囲やや削平あり。天井石露出。石室内に二上山系凝灰岩製石棺材片あり。		花田勝広氏石室実測	3B区

番号	古墳名	墳丘			石室								保存状況
		形状	法量(単位:m)		形式	法量(現存部での法量・単位:m)						開口方向	
			墳丘径(現存径)	墳丘高(現存高)		石室長	玄室			羨道			
							長	幅	高	長	幅	高		
窪山31		円墳	10.3	4.6	無袖	5.2	3.2	1.82	1.6	2.0以上か			S-14°-W	良好
窪山32		円墳	15.3	5.7	右片袖	10.65(推定)	4.25	2.4	3.3	6.4(推定)	1.7	不明	S-10°-W	やや良好
窪山33		円墳	19.1	5.0	右片袖	9.8	4.6	2.1	1.8	5.2	1.35	1.0	S-40°-W	非常に良好
窪山34		円墳	6.5	3.0	不明	2.2	不明						S-20°-W	半壊
窪山35		円墳	13.0	3.0	不明	6.3	不明						S-30°-E付近か	半壊
窪山36	ドルメン古墳	円墳	10.0	3.6	不明	2.4					1.8	1.7	S-50°-W	半壊
窪山37	狸山古墳	円墳	19.0	3.5	右片袖	8.2	3.95	1.9	2.3	4.25	1.35	1.4	真南	非常に良好
窪山38		円墳	7.0	2.0	不明	5.0	不明		2.0				真南	半壊
窪山39		円墳	14.0	5.7	両袖	8.2	4.9	1.9	2.0	3.2	1.4	1.3	S-10°-W	やや良好
窪山40	すえの森古墳	不明												
窪山41		円墳	14.3	6.0	未開口のため不明								S-45°-W(中心部石室か)	やや良好
窪山42		円墳	18.2	5.5	不明								南か?	半壊
窪山43		円墳	18.8	5.7	右片袖	6.07	3.82	1.74	2.42	2.25	1.27	1.28	真南	非常に良好
窪山44		円墳	18.8	5.7	右片袖	10.4(推定)	4.0	2.55	2.5	6.4(推定)	1.35	1.1	S-20°-E	非常に良好
窪山45		円墳	11.0	2.5	不明								S-20°-W付近か	半壊
窪山46		円墳	6.5	2.5	不明								不明	半壊
窪山47		円墳	9.2	4.2	不明								S-50°-W付近か	半壊
窪山48		円墳	9.3	2.6	不明								S-60°-W付近か	半壊
窪山49		円墳	14.1	5.0	不明								S-80°-W付近か	良好
窪山50		円墳	10.8	3.7	不明		1.4	不明					S-20°-N	半壊
窪山51		円墳	15.0	3.8	不明	4.8以上	不明						S-40°-W付近か	半壊
窪山52		円墳	約12.0	4.9	不明		4.55	2.26	2.4	不明			S-40°-W	半壊
窪山53		円墳	15.9	3.1	右片袖	8.4	3.8	2.05	2.3	4.6	1.2	0.8	S-40°-W	良好
窪山54		円墳	11.5	1.8	右片袖	5.2	3.9	1.8	1.8	1.3	1.5	0.7	S-50°-W	半壊
窪山55		円墳	6.4	1.5	不明	6.4	不明		1.5	不明			S-50°-W	半壊
窪山56		円墳	11.6	3.0	不明	3.5	不明		1.4	不明			S-20°-W	半壊

凡例

※番号は、平成18年度に八尾市教育委員会文化財課が大窪・山畑地区で行った詳細分布調査で、新たに付した古墳番号である。番号の欄で「窪山○」としているのは、「大窪・山畑○号墳の略である。

※石室の計測値については、一部を除いては、野洲市教育委員会の花田勝広氏の石室実測値を使用させていただいた。

※保存状態の欄については、下記の基準で示している。

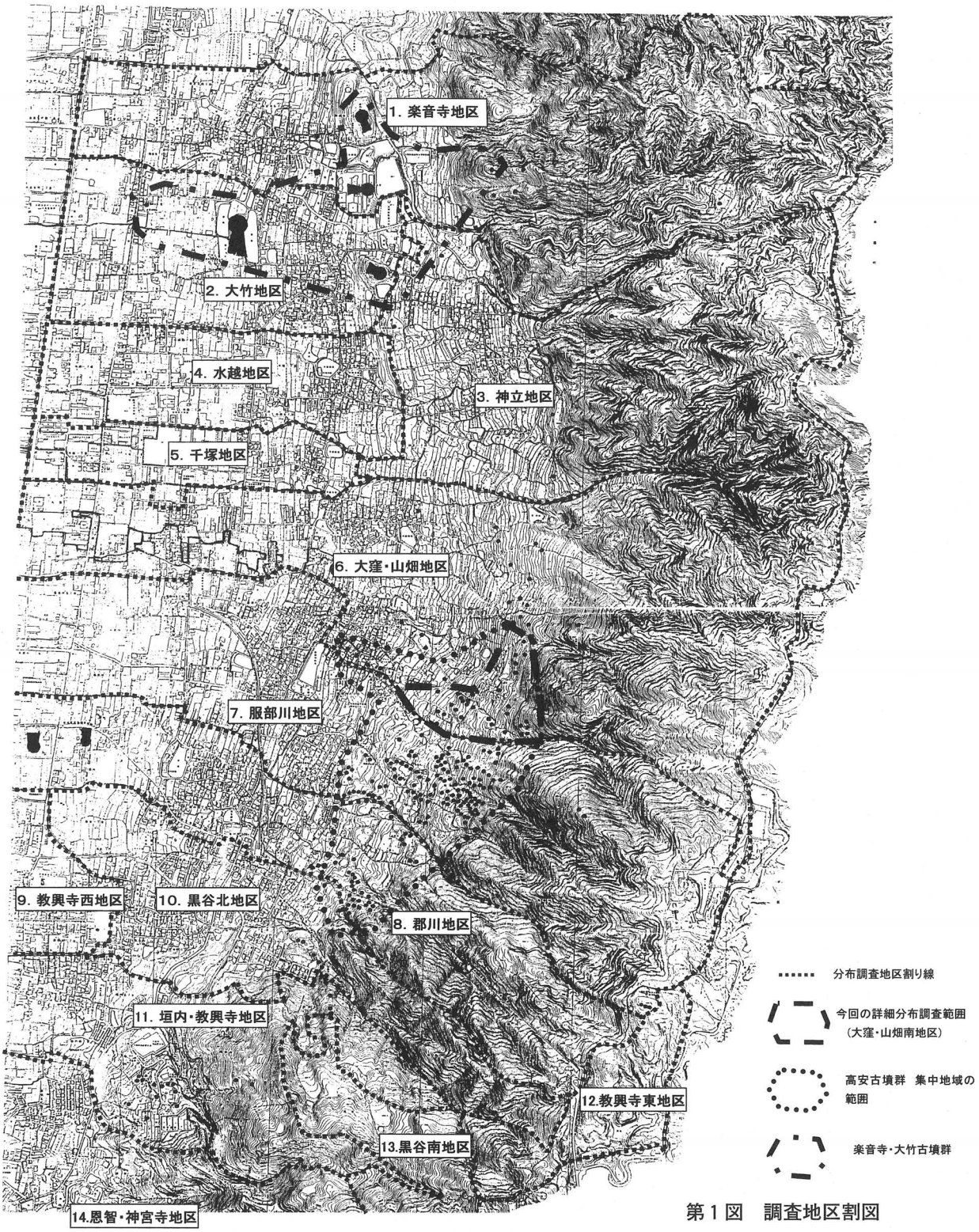
非常に良好　墳丘・石室ともに、ほとんど削平・崩落等がみられず、良好な保存状態である。
良　好　墳丘・石室の一部に削平・崩落等があるものの、全体に良好な保存状態である。
やや良好　石室は比較的良好に遺存しているが、墳丘の盛土が流出し、石室が露出している。
半　壊　墳丘・石室が、1／2以上は壊れている。
全　壊　墳丘・石室が、地表面には全く遺存していない(調査後、埋没保存されたものは、除く)。

※石室の形式の欄の「右片袖」「左片袖」は、玄室内から羨道方向を見た袖の位置で示している。

番号	既往調査の古墳番号						古墳の現状・特記事項他	文献番号	既往の測量・実測等調査	第3図での古墳の位置等
	市文化財調査目録（H5～6年）	市古文化財台帳（沢井浩三氏）（S35～38年）	高安城を探る会（S61～H2年）	大阪府教育委員会（S41～43年）	中田遺跡調査会有志他（S48～49年）	白石太一郎氏（S35～37年）				
窪山31	14号墳	27号墳	窪21		76号墳	15号墳	山林。墳丘南側やや削平あり。石室南半の石が失われているものの概して良好。		花田勝広氏石室実測	3B区
窪山32		28号墳		28号墳	75号墳	18号墳	山林。墳丘やや削平あり。羨道の石が失われている。		花田勝広氏石室実測	3B区
窪山33		14号墳		14号墳	31号墳		植木畑。墳丘・石室とも非常に良好。天井石露出。羨道部埋没するが、奥壁天井付近に開口部あり。山崎直方氏スケッチか?。	(11)	花田勝広氏石室実測	第2図
窪山34	27号墳						花き畑。石室左側壁残存。天井石と側壁とみられる石が転落。墳丘西半を中心に削平。			第2図
窪山35	28号墳						花き畑。玄室左側壁と羨道部天井石とみられる石が残存。墳丘西半を中心に削平。			第2図
窪山36	29号墳	16号墳	窪2	16号墳	32号墳		もと植木畑。墳丘は盛土の大半が流出し、石室も天井石1石と側壁の一部を残してドルメン状となる。	(12)	坪井正五郎氏らが明治21年に大窪のドルメンとして紹介。花田勝広氏石室実測	第2図
窪山37	30号墳	13号墳	窪1	13号墳	30号墳		現状はササの茂る藪。墳丘・石室ともに良好。奥壁の石、やや欠落。	(13)	花田勝広氏石室実測	第2図
窪山38	31号墳	15号墳		15号墳	29号墳		植木畑。墳丘は西側を中心に削平を受ける。池の堤の崖面に石室左側壁が残存。			第2図
窪山39	87号墳	43号墳	山1	43号墳			植木畑。石室は南半を中心に削平、一部植木畑となる。長方形の玄室をもつ特徴的な石室。	(14)	花田勝広氏石室実測	第2図
窪山40							二上山産凝灰岩製組合せ式家形石棺、開墾により出土。	(15)		第2図
窪山41					83号墳？	24~26号墳？	山林。墳丘周囲削平。墳丘西側に左側壁かとみられる石材あり。中心部は未開口とみられ、一墳丘に二石室の可能性あり。			3B区
窪山42					83号墳？	24~26号墳？	山林。石室上半は南側中心に削平。墳丘北側残存。石室石材散乱。			3B区
窪山43		26号墳			73号墳	11号墳	山林。44号墳と同一墳丘か。石室内祭壇あり。			3B区
窪山44		42号墳			74号墳		山林。43号墳と同一墳丘か。羨道南半埋没。沢井氏調査時、石棺材片確認。		花田勝広氏石室実測	3B区
窪山45					57号墳？	12号墳？	山林。石室石材抜き取り痕とみられる落ち込みあり。			3B区
窪山46					80号墳		山林。墳丘西半削平され、石室石材抜かれ、天井石等落ち込む。窪山30号に西接する。			3B区
窪山47					81号墳？		山林。石室石材抜き取り痕とみられる陥没。墳丘は残存。			3B区
窪山48							山林。墳丘南側中心に削平。墳丘一部残存。石室石材とみられる石あり。			2B区
窪山49					92号墳		山林。墳丘東から北にかけて削平あり。石室未開口。			1B区
窪山50							山林。墳丘西から南削平。右側壁一部のみ残存。石室石材抜き取りによる落ち込みあり。			3B区
窪山51							山林（もとは植木畑）。墳丘西側から南を中心に削平。石室石材抜き取りによる落ち込みあり。左側石の一部のみ残存。			3A区
窪山52		44号墳	窪3	44号墳	222号墳	39号墳	個人宅の庭園内。石室玄室前面～羨道削平。墳丘東半残存。		花田勝広氏石室実測	第2図
窪山53		18号墳		19号墳	35号墳		植木畑。墳丘は植木抜取り等による削平や穴がある。石室は奥壁等の石が抜け崩落の危険あり。		花田勝広氏石室実測	第2図
窪山54		19号墳		20号墳	34号墳		植木畑。墳丘は盛土が流出し、石室も奥壁側の石が失われ、ドルメン状になっている。羨道部埋没。		花田勝広氏石室実測	第2図
窪山55							もと植木畑。墳丘は西側を中心に削平を受ける。崖面に石室左側壁が残存。			第2図
窪山56							もと植木畑。墳丘は西側を中心に削平を受ける。崖面に石室左側壁が石積み4段分位が残存。			第2図

文献番号

(1) 八尾市教育委員会1991年 『八尾市内遺跡平成2年度発掘調査報告書』
(2) 八尾市史編纂委員会1988年 『八尾市史(前近代編)』
(3) 八尾市教育委員会1994年 『八尾市内遺跡平成5年度発掘調査報告書』
(4) 白石太一郎1966年 「畿内の後期大型群集墳に関する一試考―河内高安千塚及平尾山千塚を中心として―」 『古代学研究』42・43合併号
(5) 大阪府教育委員会1966年 「八尾市高安古墳群の調査 昭和41年度第1次郡川其他地区調査概要」 『大阪府文化財調査概要1965・1966年度』
(6) 上田宏範編2007年 『ロマイン・ヒッチコック―滞日二か年の足跡―』 （社）橿原考古学協会
(7) ヴィクター・ハリス 後藤和雄責任編集2003年 『ガウランド 日本考古学の父』 朝日新聞社 大英博物館
(8) 八尾市教育委員会2003年 『八尾市内遺跡平成14年度発掘調査報告書』
(9) 足代健二郎1995年 「俊徳丸鏡塚・箸塚・順教尼考」 『大阪春秋』第81号
(10) （財）八尾市文化財調査研究会 2005年 「高安古墳群（大阪府八尾市大窪所在）大窪29号墳の現地説明会資料」
(11) 山崎直方1888年「河内高安郡塚穴実見記事」『東京人類学雑誌』第28号
(12) 坪井正五郎1888年 「三十國巡回日記第二回」『東京人類学会雑誌』第3巻第28号
坪井正五郎1888年 「古墳、塚穴、ドルメン同源説」 『理学協会雑誌』第6輯第49号
(13) 澤井浩三1969年 『八尾の古文化財 1古墳』 八尾市
(14) 大阪府教育委員会2004年 『高安古墳群発掘調査概要 府営農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業八尾地区の調査』
(15) 原田修 久貝健 島田和子「高安の遺跡と遺物」1976年 『大阪文化誌』第2巻第2号通巻第6号 「特輯 清原得厳所蔵考古資料目録」 （財）大阪文化財センター

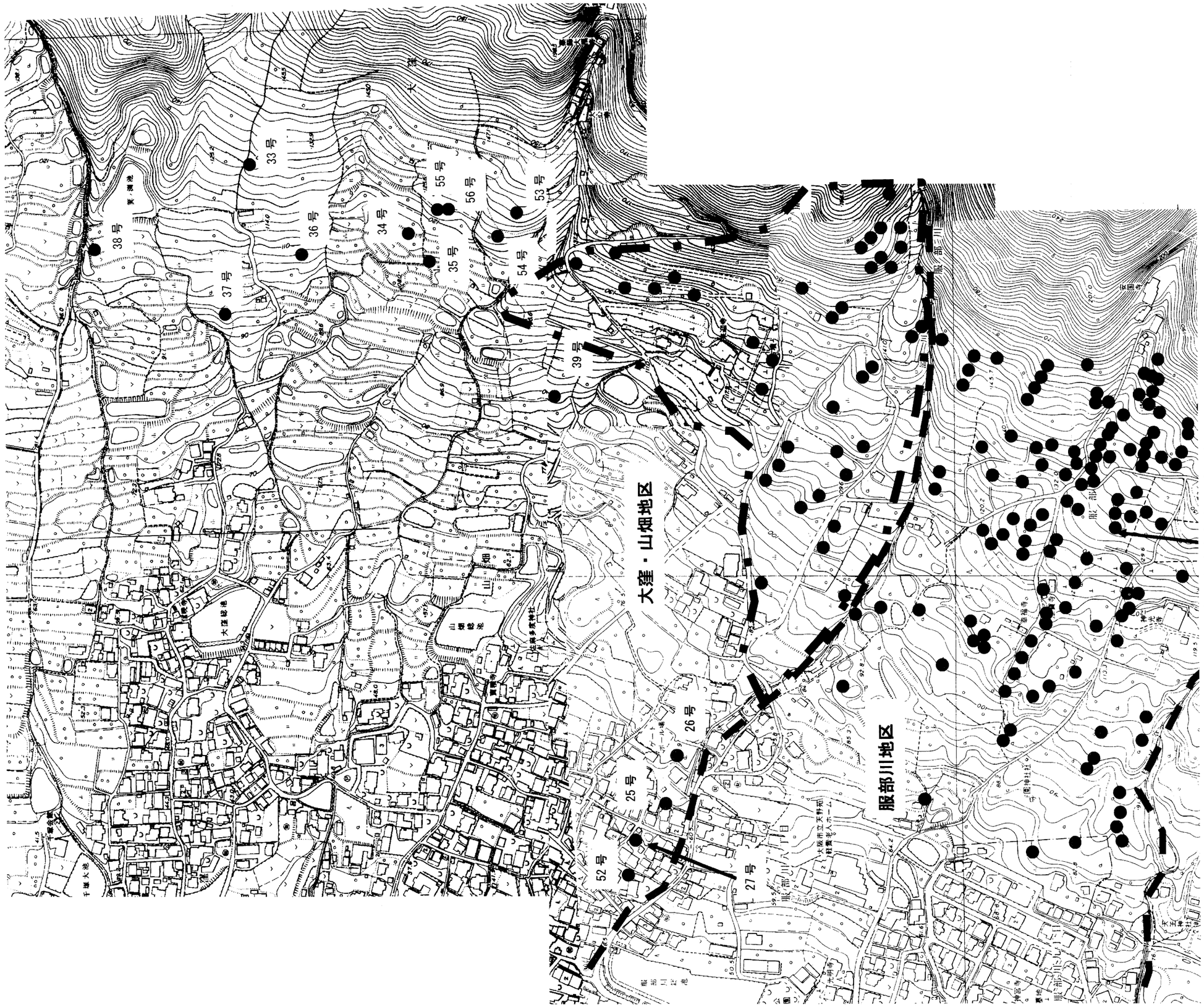


第１図　調査地区割図

地区番号	地区	全体の古墳の数	高安古墳群の古墳の数（山麓全体の後期古墳）	国・府・市指定の古墳数	国・府・市指定の古墳名
1	楽音寺地区	8	5	0	
2	大竹地区	3	0	2	国史跡心合寺山古墳・府史跡鏡塚古墳
3	神立地区	8	7	1	府史跡愛宕塚古墳
4	水越地区	0	0	0	
5	千塚地区	0	0	0	
6	山畑・大窪地区	56	56	0	
7	服部川（高安山古墳群を含む）地区	138	138	1	市史跡二室塚古墳
8	郡川地区	31	31	5	市史跡関山塚古墳・郡川2号墳・郡川3号墳・郡川3−B号墳・郡川4号墳
9	教興寺西地区	2	2	0	
10	黒谷北地区	16	16	0	
11	垣内・教興寺地区	28	23	0	
12	黒谷南地区	3	3	0	
13	教興寺東地区	0	0	0	
14	恩智・神宮寺地区	5	5	0	
	計	298	286	9	

※本表の古墳数は、平成19年３月現在の数であり、服部川地区と大窪・山畑南地区以外は、詳細分布調査を行っていないため、他の調査で確認されていても数に含めていないものもあり、今後の詳細分布調査により増加するものとみられる。

表1　高安古墳群と山麓の古墳　地区別の数（平成19年3月現在）



第2図　高安古墳群　大窪・山畑地区　服部川地区　古墳分布図

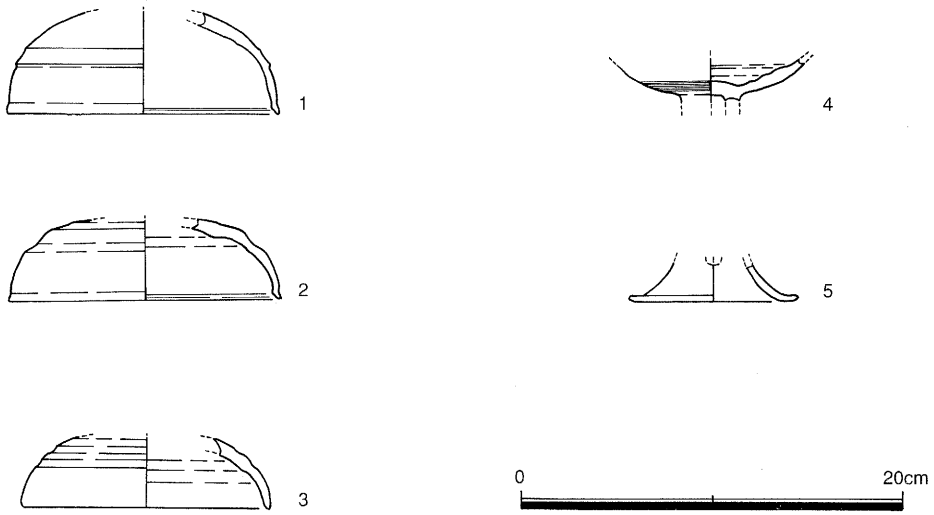
第３図　大窪・山畑南地区　古墳・古墳状地点分布図（1/2000）（※大阪府教育委員会2004年『高安古墳群発掘調査概要』掲載の農道整備事業に伴う地形図をもとに作成。　※地区割線は表２の「第３図での位置」の欄に対応する。）

〈付載１〉大窪・山畑21号墳　表面採集の遺物（第４図）

今回の詳細分布調査において、大窪・山畑21号墳の玄室内の流入土上面において、須恵器片5点を表面採集したので、報告しておく。本墳は、大窪・山畑地区の南東側、標高140～144mの緩傾斜面上に、大窪・山畑22号墳と並んで造られている。墳丘は、現存の直径12.5m、高さは北側で6.4mを測る円墳である。本墳の石室は、右片袖式で、石室現存長６m、玄室長3.35m、玄室幅2.15m、玄室現高３mを測る。玄室の平面プランは、玄室長に対して玄室幅が広いもので、小形の石材をドーム状に持ち送る古式の石室である。南東側に隣接する22号墳も同様の石室を有する。本墳は、白石太一郎氏が1966年の論文に、第20号墳とされ、氏の第Ｉ型式の石室を有する古墳として、石室図面を掲載されて、取り上げられた古墳である(註１)。また、本墳では、大阪府教育委員会による1966年度の分布調査時に、凝灰岩製組合式家形石棺材片を採集したと報告されている(註２)。表面採集した須恵器片は、玄室内の北東隅付近と中央付近で確認した。1は、高坏あるいは坏の蓋であり、田辺編年(註３・４)のＴＫ10型式期頃に位置づけられる。２・３は、坏蓋であり、２はＴＫ10型式の新段階からＴＫ43型式期頃に、３はＴＫ43型式期頃に位置づけられる。４は、高坏の坏部である。５は短脚高坏の脚部である。今回、採集した資料において、１の高坏あるいは坏の蓋については、須恵器型式からみると、6世紀中頃の時期とみられるものであり、石室の形態が古式であることと符合し、初葬時の副葬遺物の可能性がある。また、２については6世紀後半頃に、３については６世紀後葉から末頃の時期とみられ、追葬時の副葬遺物の可能性がある。本資料は表面採集資料であるため、資料的には限界のあるものだが、本墳の築造年代を推定するにあたっての参考資料とはなろう。

（註１）白石太一郎　1966年「畿内の後期大型群集墳に関する一試考―河内高安千塚及び平尾山千塚を中心として－」『古代学研究』第42・43合併号
（註２）大阪府教育委員会1966年「八尾市高安古墳群の調査－昭和41年度第1次郡川其他地区調査概要－」『大阪府文化財調査概要1965・66年度』
（註３）田辺昭三1966年『陶邑古窯址群。』平安学園考古学クラブ
（註４）田辺昭三1981年『須恵器大成』角川書店

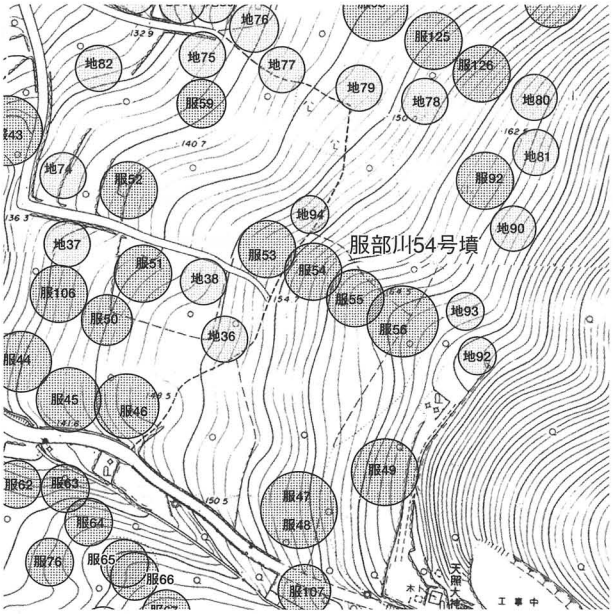
遺物番号	器　種	部　位	法量（単位：cm）		色　調		焼　成	胎　土
			径	最大残存高	外　面	内　面		
1	坏　蓋		１４．４	５．３	淡灰青色	灰青色	硬　質	普　通
2	坏　蓋		１４．４	４．２	灰白色	灰白色	やや軟	やや粗
3	坏　蓋		１３	３．７	淡灰白色	淡灰白色	軟　質	やや粗
4	高　坏	坏　部	不明	２．２	灰　色	灰青色	硬　質	やや粗
5	高　坏	脚　部	８．２	2	淡灰青色	淡灰青色	硬　質	やや良



第４図　出土遺物実測図（1/4）

〈付載２〉服部川54号墳　表面採集の遺物（第６図）

今回報告するのは、昨年の３月、平成17年度の詳細分布調査の際に、服部川54号墳の玄室内右側壁側付近の流入土上面で、表面採集した須恵器片２点と石棺材片とみられる遺物２点である。昨年度の報告書には実測等が間に合わなかったため、本年度、報告するものである。本墳は服部川地区の東側、標高150～160mの尾根上に立地する。付近には同一尾根上に、54号墳を含め、４基の横穴式石室墳が連続して立地している。本墳は、現存の直径16.9m、高さ4.5mを測る円墳である。石室は右片袖式で、現存長は9.5mを測る。玄室の平面プランは長方形で、玄室の石積みは５段から６段で積まれ、袖石は３石よりなる。

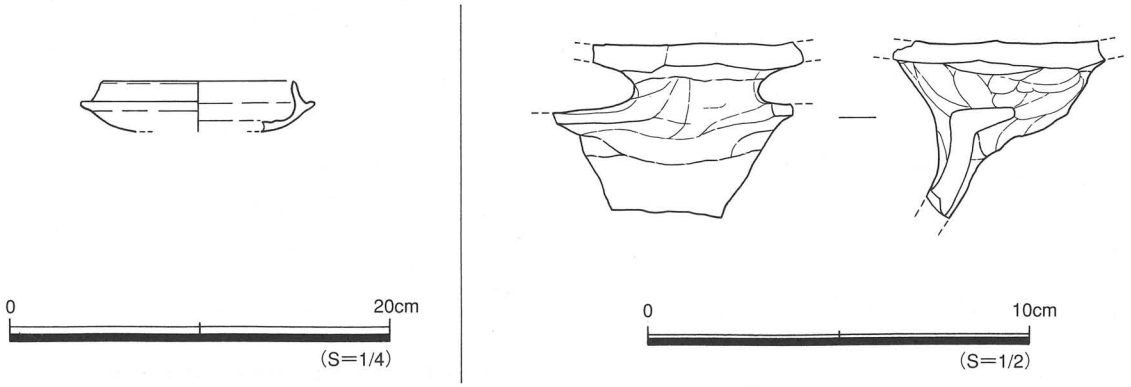


第５図　服部川54号墳位置図（1/2000）

１は須恵器の坏身である。田辺編年(註１)のＴＫ10～ＴＫ43型式期頃に位置づけられる。２は装飾器台の小片である。子壷等を高坏部口縁に取り付けた装飾器台の一部とみられる。高坏部口縁から小壷あるいは小型の甕の底部にかけての破片である。1の坏身については、須恵器の型式編年から、６世紀中葉から後葉にかけての時期とみられる。数少ない表面採集資料であるため、限界があるが、本墳の築造年代を推定する資料の一つにはなろう。また、石棺材片とみられる遺物（図版27の中段－３・４）は、端面が遺存していないため、実測は行っていないが、２点とも、残存長７～９ｃｍを測るものである。石材種は、判然としないが、明らかに二上山産の凝灰岩とは異なる、肌理の細かい石材であり、開山塚古墳で表面採集した石棺材のうち、神戸層群の凝灰質砂岩かとしたものに類似する(註２)。

（註１）田辺昭三1966年『陶邑古窯址群』平安学園考古学クラブ
（註２）八尾市教育委員会2006年『高安古墳群分布・測量調査報告書－服部川地区詳細分布調査　郡川４号墳測量・実測調査他－』

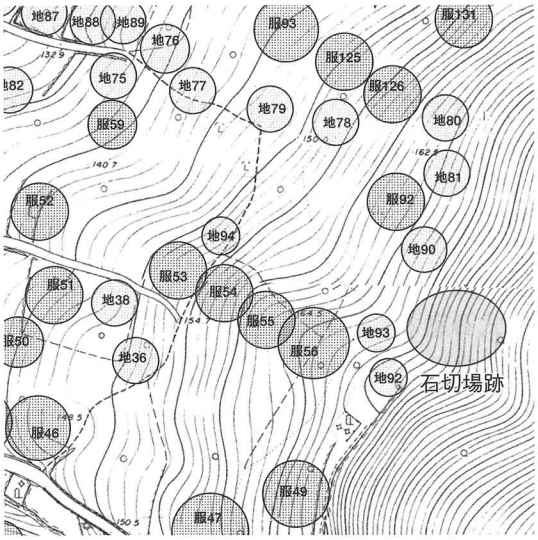
遺物番号	器　種	法量（単位：cm）		色　調		焼　成	胎　土
		径	最大残存高	外　面	内　面		
1	杯　身	１０．２	２．６	灰青色	灰青色	硬　質	やや良
2	装飾器台		４．６	灰青色	灰青色	硬　質	普　通



第６図　出土遺物実測図

〈付載3〉服部川地区で確認した石切場跡の踏査報告

昨年度、平成18年３月20日に行った高安古墳群詳細分布調査において、服部川56号墳の東側の斜面で、石切場跡とみられる場所を確認した。この石切場跡については、時期が判然としないが、これまで八尾市の生駒西麓においては、石切場は確認されておらず、今回の確認例は、高安古墳群における石材の利用を検討する資料の一つになるものと考えられるため、ここに報告しておく。



第７図　石切場跡位置図

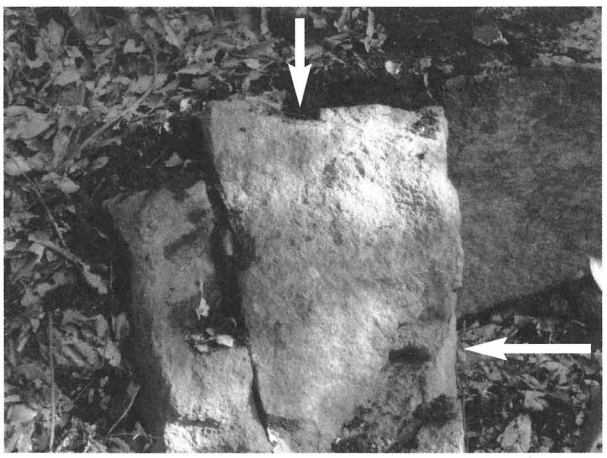
確認した位置は、服部川56号墳の北東30m付近である。付近には、花崗岩の木端かとみられるものが、散乱していた。石切場とみられる場所は、谷地形に位置し、南北6.5m前後、東西8m前後、高さ8.4mの範囲で、花崗岩の岩盤が露出しており、石を切り出した後の割面がみられ、矢穴の痕跡が二箇所、遺存していた。矢穴は、平面形状が長方形で、長さ５ｃｍ、幅２ｃｍ、深さ３ｃｍを計る。また、石切場跡の西側下方には、三段の段状に斜面を削った痕跡があり、一部に石垣がみられた。この段の下には平坦地があり、この平坦地を造成するために、斜面を削ったものと考えられ、石切場に伴う作業場の可能性もある。

高安地域では、古くは、天正年間の大坂城築城の際に、千塚の石を利用したという記録があり、江戸時代では、宝永2年に大阪市平野に所在する融通念仏宗の本山大念仏寺の礎石を、高安の村々からも調達している(註1)。また、八尾市立歴史民俗資料館には、服部川地区で、近代に活用された石材を運ぶバリキが保管されている(前掲註１)。これらの所例は、高安古墳群の石室石材や自然の転石を利用したものとも考えられる。実際に、高安古墳群では、黒谷7号墳(妙見寺境内2号墳)や、今回、確認した山畑の古墳状地点187のように、石材に矢穴が遺存するものがある。

今回、確認した石切場跡のあり方からは、近世あるいは近代のいつの時期かは判然としないが、高安地域では、花崗岩の露頭からの石の切り出しも行われていたものと考えられる。今回の報告では、資料の検討不足のため、不明の部分が多い。多くのご教示をいただければ、幸いである。

（註１）小谷利明2005年「八尾市高安地域の石材活用の一事例」『関西近世考古学研究13　石から見た近世文化』関西近世考古学研究会

石切場跡　南西より


矢穴の残された石（矢印位置が矢穴）

Ⅱ. 高安古墳群　二室塚古墳の測量調査等の報告

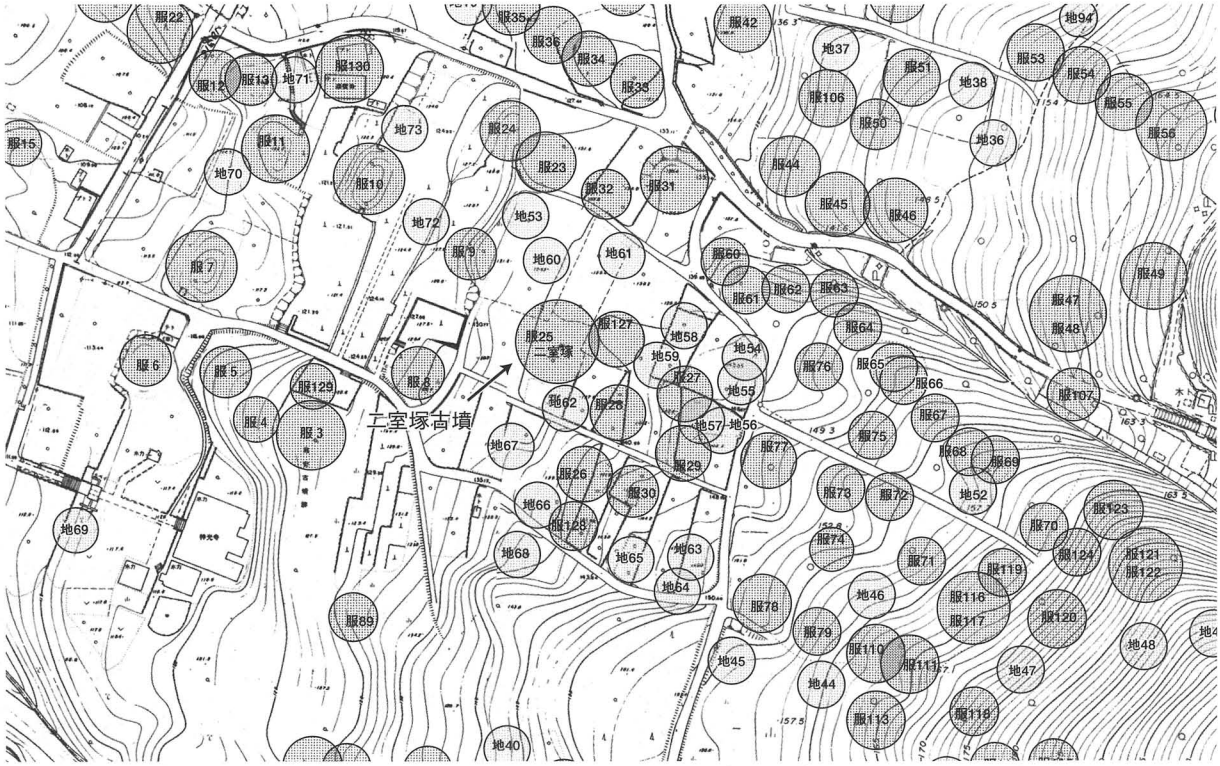
1. 調査の経緯

本年度は、服部川の二室塚古墳について、その文化財的価値を明らかにし保存を計るため、墳丘測量と写真撮影を行った。石室については、既に野洲市教育委員会の花田勝広氏が実測調査をされており、今回、氏の実測図の原図（S－1/40）のトレースとレベル線の記入を本課で行ったうえで、第10図に掲載した。測量については、（株）相互技研に委託し、平成18年10月16日～10月27日の間で、電子平板による実地測量を行い、0.2mコンターで、スケール1/100の図を作成するとともに、平成18年10月22日航空写真撮影を行った。また、今回の調査においては、二室塚古墳の墳丘に重なるように、右片袖式の横穴式石室である服部川127号墳が造られているため、127号墳についても併せて墳丘測量を行った。さらに二室塚古墳については、阿南写真工房の阿南辰秀氏に、写真撮影を委託し、石室内部の清掃を行ったうえで、平成18年10月30日、11月６日～８日で写真撮影を行った。

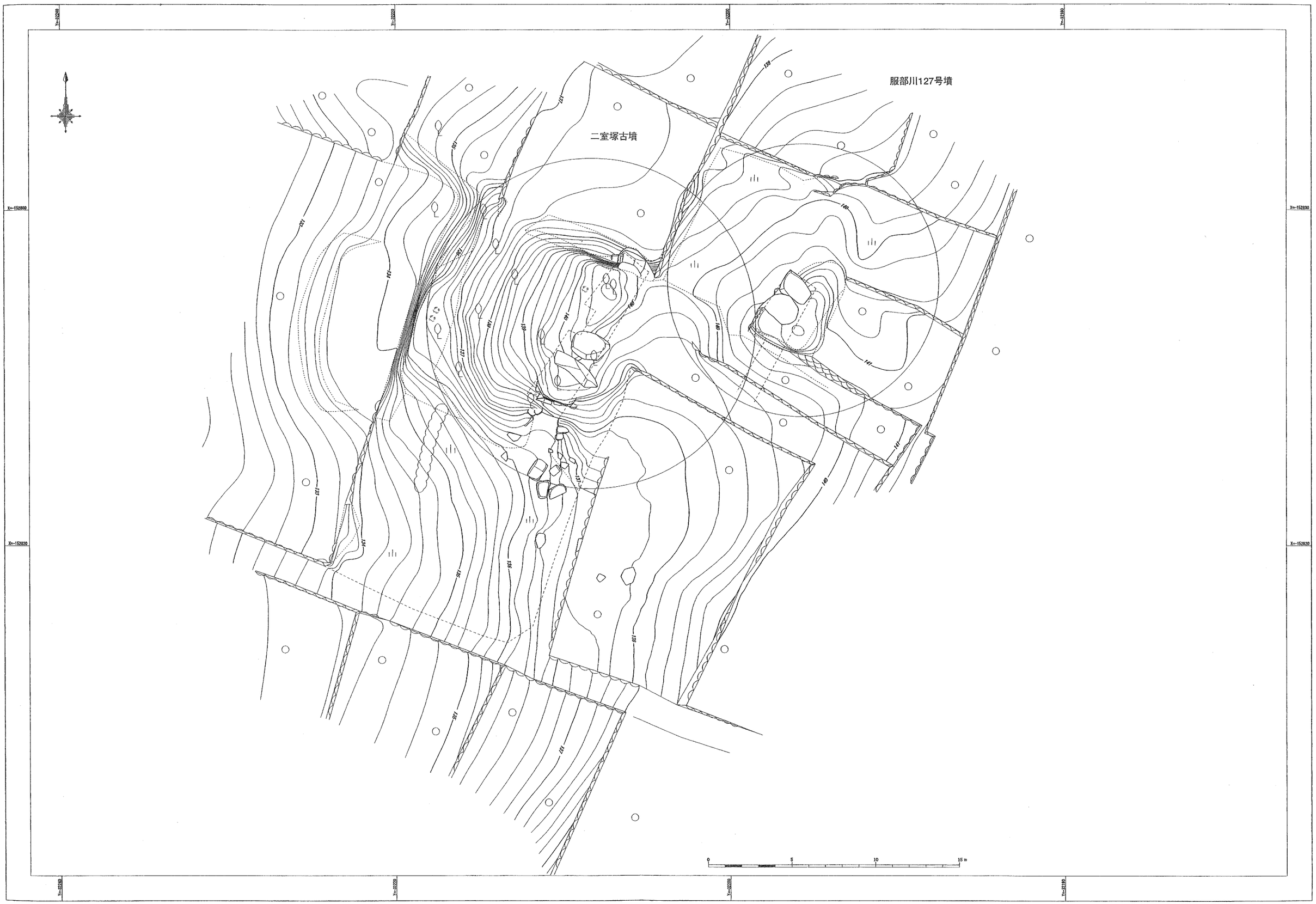
2. 調査概要

［位置と環境］（第８図）

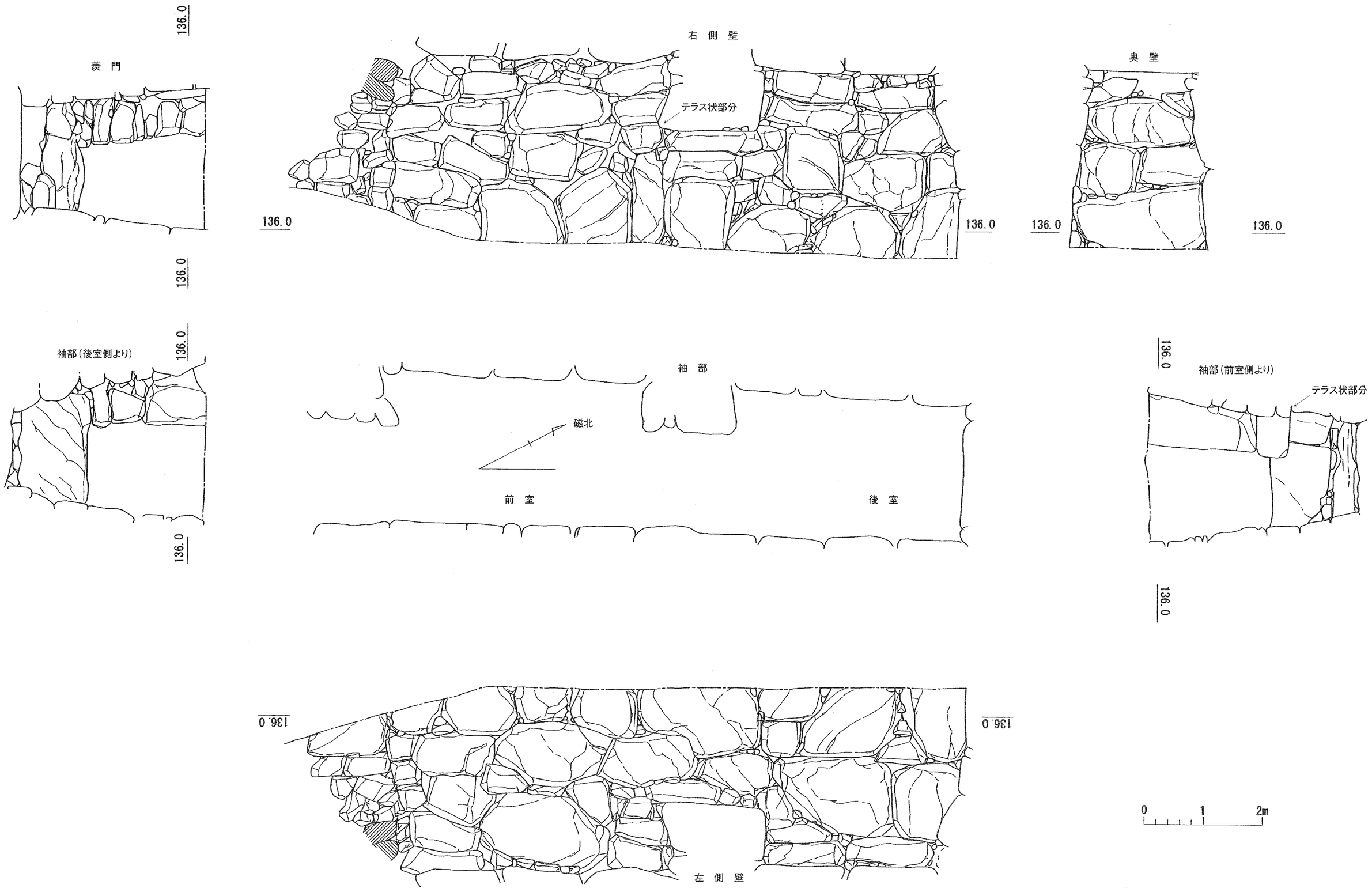
二室塚古墳は、八尾市服部川693-21の一部及び本地番に東接する無番地付近に所在する。ここは、八尾市の東部山麓に広がる高安古墳群の中でも、「高安千塚」と称される、最も古墳の集中する地域にあって、さらにその中心地域である服部川地区に位置する。二室塚古墳の周辺は、墳丘を重ねるようにして、古墳が密集しており、二室塚古墳の墳丘北東側は、服部川127号墳の墳丘裾と重複する。二室塚古墳は、標高133m～140mの見晴しの良い緩傾斜面の尾根上に造られており、古墳の東西には、同一尾根上に築造された古墳が並ぶ。二室塚古墳の現況は、墳丘の石室上部が、雑木で覆われており、特に墳頂には高さ８m近くにもなる高木が生えている。周囲は植木畑に囲まれているが、南側は現在植木畑として使用されていないために、平地となっている。



第８図　二室塚古墳位置図（1/2000）



第９図　二室塚古墳・服部川127号墳　墳丘測量図（1/200）



第10図　二室塚古墳　石室実測図（1/60）［花田勝広氏　実測図をトレース］

[墳丘の測量調査]（第９図）

墳丘測量図から、墳丘の規模と形状について、みてみたい。墳丘の裾は、墳丘南西側の等高線のあり方から、標高135m～136m前後になるかとみられる。石室の床面については、大阪府教育委員会による昭和41年度の調査により、床面清掃が行われたと記述されていることから(註1)、ほぼ現況の床面が、本来の床面の高さであるとすれば、標高135.5m付近となり、先述した墳丘南西側の等高線のあり方とも矛盾せず、この高さが墳丘の裾になるものとみられる。また、墳丘の北東側には、墳丘裾の名残りかと見られる緩やかな谷状地形がみられる。この位置と先の墳丘南西側の標高135.5m付近の位置とを、石室長軸上に結ぶと長さ20m前後となる。またこの線を折半する点、すなわち墳丘の中心点は、石室の前室と後室の間の点となる。この点を中心として、東西方向に直径20mの墳丘範囲を想定すると、西側は、標高135mの等高線のある崖面付近となる。これより西側に墳丘が広がるとは地形的に考えにくいことから、この付近が西裾とみられる。東側は、谷状に削平されているため判然としないが、西側の墳丘のあり方からみて、東側も本来は、石室から半径10m前後までが墳丘範囲となるものと思われる。

なお、墳丘西裾の推定線のさらに西側の標高132m～134m付近の等高線も、緩やかな円弧を描いている。当初は、これも二室塚古墳の墳丘の痕跡かと考えたが、石室の位置や、周囲の地形から見て、ここに墳丘裾を推定することは、困難である。墳丘中心部からこの円弧状の張り出しの地形を結ぶ円を描くと、北側・東側・南側の地形は、谷地形である。墳丘の西側を画するために、地形を平らに整地した痕跡か、あるいは、別の古墳が存在したのか、判然としない。

二室塚古墳の墳丘範囲は、石室の前室と後室の間の点を中心として、直径20m前後の範囲と考えられる。通常の横穴式石室の墳丘は、奥壁付近を墳丘の中心の位置に設定される場合が多いが、玄室を二つ有する二室塚古墳においては、墳丘の中心が、前室と後室の間の点に設定されていた可能性が高い(註2)。このことから、二室塚古墳の墳丘範囲は、石室の前室と後室の間の点を中心として、直径20m前後の範囲と考えられる。墳丘の高さは、墳頂部の最高点が標高140.63mであり、墳丘の裾の高さは標高135.5m前後となることから、高さ5.1m前後と推定される。

さらに、墳丘の残りの良い墳丘西側から南側の等高線を詳細にみると、南北に直線状に延びており、この部分を見ると、本墳が方墳になる可能性も想定できるが、墳丘南面の等高線はむしろ円弧を描くようであり、判然としない。このことから、直径20m前後の円墳ないしは一辺20mの方墳の可能性も考えられる。

墳丘の保存状況は、北側と東側にかけて、植木畑の造成のために削平を受けているものの、墳丘の石室部分及び墳丘の西から南にかけては、残りが良く、特に墳丘の南側からは、石室の開口部と墳丘のあり方がよくわかる。概して良好といえよう。

なお、墳丘の北東側は、服部川127号墳の墳丘が一部、重なる形となり、測量図をみる限りでは、服部川127号墳が二室塚古墳の墳丘の北東裾に載る形となることから、服部川127号墳は、二室塚古墳の後に築造された可能性が考えられる。

[石室の状況]（第10図・巻頭写真・図版26）

第10図の花田氏作成の石室図面をもとに、その構造と規模をみていきたい。

石室の開口方向は南西方向で、S-56°-Wである。石室は、右片袖式の複室構造で、全長11.2mを測る。石室の法量は、下表のとおりである。

単位:m	後　室	袖　部	前　室	羨　道
長　さ	3.82	1.5	4.4	1.6
幅	2.3	1.7	2.4	1.6
高　さ	3.05	2.0	3.2	1.8

表５　二室塚古墳石室各部の法量

石室の石積みは、羨道以外は、径１～２ｍの石材を中心に３～４段に積んでいる。前室・後室間の袖部は、通常の石室とは異なり、垂直方向に二列の石材により構成される。前室・後室間の壁をなす天井石は、後室側の三段積み（縦石１石＋横石２石）の上に架構され、さらに右側壁側に、小振りの石が天井石として載せられる。袖部の前室側は、縦長の石に小振りの石を２段積みとするが、この上には、天井石がほとんど乗らないために、上部はテラス状になっている。しかし、これは通常の石棚というべきものとは捉えられない。むしろ、袖部を二列の石材で構成し、この部分を構造上、補強させるとともに、前室側の袖部は天井石がほとんど載らないために、独立した柱状の形状となっている点が、注意される。

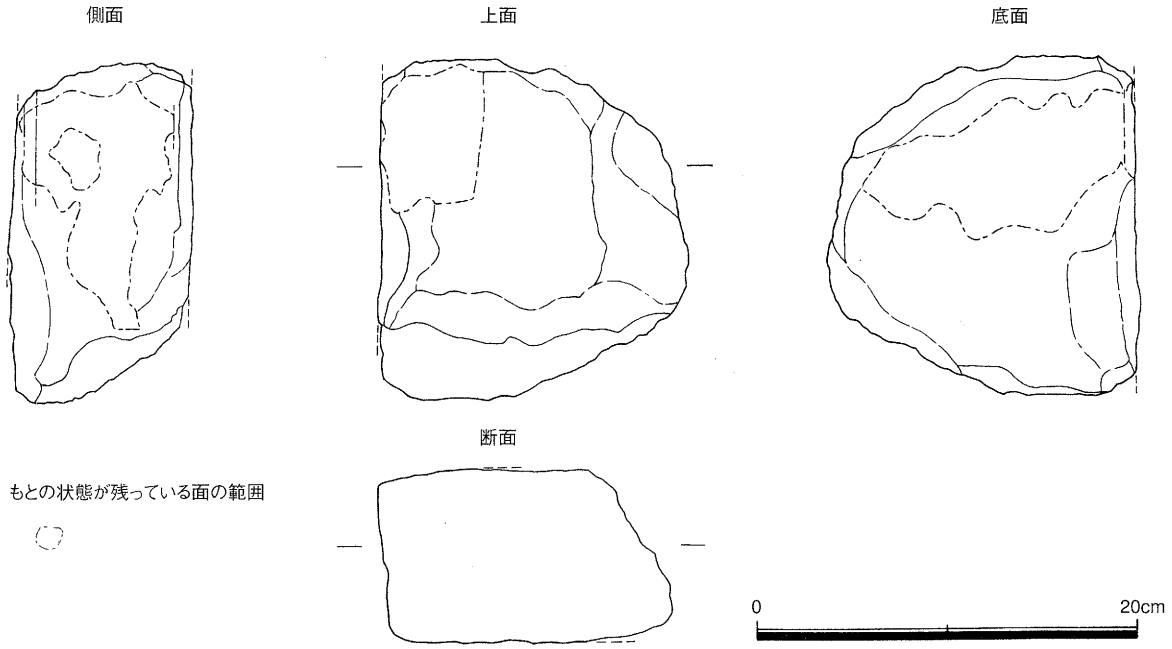
羨道の石材は、径0.8m前後の小振りなものを平積みして積んでおり、袖部となる右側壁では、石材が小振りなためか、ややドーム状に持ち送られている。二室塚古墳の羨道は、石材が一部欠矢しているため判然としないが、石材も小振りで、長さも短かい事が、特徴的である。

次に、石室の保存状態をみておきたい。石室は羨道と前室の間の天井石一石が崩落しており、羨道の右側壁も一部欠失している。この部分は石材が小振りなだけに崩壊の危険がある。また、羨道端の基底石も一部、欠失している可能性がある。この付近の石は、石室開口部の南側に転落して、現存する。奥壁の最上段の石も外側に崩落しており、ここから土が流入し、後室の奥壁付近に、高さ0.9m前後の小山状に堆積していた。これは、昭和41年度の大阪府教育委員会の調査以降に堆積したものとみられ、今回の写真撮影に伴い、除去した。また、前室の右側壁の石材も２箇所程、石材が欠失している。このように石室の保存状況は、羨道部分を中心に石材の崩落がみられるが、他は概して良好に遺存している。

［出土遺物］（第11図）

写真撮影のための清掃に伴い、二上山産系凝灰岩製とみられる石棺材片1点を採集したが、須恵器等

遺物番号	器　種	法量（単位：cm）			色　調	石材種	調　整　等
		最大残存長	最大残存幅	最大厚			
1	底板か	１７．６	１６．２	９．６	淡灰白色	二上山産系白色凝灰岩	調整は明瞭に見えず。赤色顔料が表面と側面に残存。



第11図　二室塚古墳表面採集石棺材　実測図（1/4）

の遺物は確認できなかった。今回、採集した石棺材片は、二室塚古墳の清掃に伴い、転落石材とともに、石室外に持ち出した段階で確認したため、出土位置が前室か後室かは判然としない。組み合わせ式の石棺の底板とみられる部材である。最大残長17.6ｃｍ、最大厚9.6ｃｍを測る。上面と側面は、比較的滑らかであるが、製作に伴う調整は、摩滅のため確認できなかった。底面は、凹凸がやや残り、調整が粗いようである。また、上面と側面には、赤色顔料の塗布が僅かに認められた。なお、大阪府教育委員会による昭和41年度の調査概要によると、床面には盗掘のために生じた穴が随所に見られ、ほとんどもとの状態を残しておらず、敷石等の施設も認められなかったとある。また、床面上に堆積する土の中から、石棺材とみられる凝灰岩小片、耳環２点、土師器、須恵器の小片が出土したと記述されている(註３)。

[築造時期]

出土遺物が僅少なため、築造時期を考える材料に欠くが、石室の石積みの方法等からみれば、６世紀後半頃と考えられる。

[まとめ]

今回の測量調査及びこれまでの調査から、二室塚古墳は、６世紀後半頃に築造された直径20m前後、高さ5.1m前後の円墳ないしは一辺20mの方墳の可能性のある事がわかった。また、石室は複室構造で、石室内には、凝灰岩製組合式石棺が納められていたことが確認できた。また保存状況は、石室・墳丘とも概して良好であることが、確認できた。

3. 二室塚古墳の複室構造について

高安古墳群において、複室構造の石室は、今回調査した服部川の二室塚古墳の他に、郡川の交互二室塚古墳がある(註４)。二室塚古墳は、前室・後室ともに、右片袖式であるのに対し、交互二室塚古墳は、前室が左片袖式、後室が右片袖式となる。二室塚古墳・交互二室塚古墳にみられるような複室構造の石室は、全国的にも類例がない。

柳沢一男氏によると、玄室の前面に１つないしは２つの前室を設けた複室構造の石室は、全国で約1030基が知られ、九州・四国・近畿・北陸・東海・関東の各地に広がり、なかでも、九州中北部には、850基を上回る複室構造が集中するとされる。柳沢氏によると、九州の複室構造の石室は、早くに乙益重隆氏が指摘されたように、肥後北部を起源とし、柳沢氏のいわれる「羨道間仕切り型」として独自に発案されたものと考えられている(註５)。

奈良県、兵庫県で僅かに確認できる複室構造に近い例では、奈良県奈良市の帯解黄金塚古墳例が、羨道が三室に分かれる構造である(註６)。兵庫県宝塚市中筋山手東２号墳例は、山崎信二氏が指摘されているように、高安古墳群の複室構造とは大きく異なり、九州の複室構造の影響は受けてはいるが、地域性の高いものである。

二室塚古墳の石室の特徴についても、山崎信二氏により、既に指摘されている(註７)。山崎氏は、右側壁を含む図面を作成・提示されたうえで、九州の複室構造が、両袖式で、玄門立柱が内側に張り出し、後室が広く前室が狭いという、定型化した構造であるのに対し、二室塚古墳、交互二室塚古墳の石室は、畿内型の片袖式の石室を２基連結した形をなし、後室より前室の優位性がむしろめだつとされている。特異な構造として、九州の影響を受けて築造されたものではなく、高安古墳群に多くある単室構造の横穴式石室の特徴の中に、その基本的な性格が内包されているとみられている。

二室塚古墳は、高安古墳群内の中規模の右片袖式石室を縦に繋いだような構造である。交互二室塚古墳も、中規模の右片袖式の石室に、中規模の左片袖式の石室を縦に繋いだような構造である。畿内の横穴式石室の属性分類に基づく研究をなされた太田宏明氏は、二室塚古墳の石室について、玄室側壁３類、袖部３類、奥壁４類、前壁３類という典型的な畿内型石室５～６群の石室であることを、指摘されている(註８)。

高安古墳群の二室塚古墳、そして交互二室塚古墳の特徴は、まさに、山崎氏や太田氏が指摘されたよ

うに、高安古墳群に通有の畿内型の石室の中から、独自に生み出されたものといえる。

なお、九州における複室構造の石室においては、前室という空間自体が葬送儀礼が行われ、その結果として土器が副葬される場所として機能していたと考えられることが指摘されている(註9)。二室塚古墳、交互二室塚古墳については、前室・後室とも、埋葬を主体とする場として、当初から、意図して構築されたことは明らかである。高安古墳群においても、服部川47号・48号墳、服部川116号・117号墳、服部川121号・122号墳、大窪・山畑43号・44号のように、同一墳丘に、二つの石室が造られているとみられるものは存在するが、二室塚古墳、交互二室塚古墳の場合は、これとは異なり、葬送に際して、埋葬の場としての玄室を二つ繋げる必要のある何らかの特殊な事情があったとみられる。

さらに、このような複室構造の石室が当時の畿内政権の拠点であり、畿内型の大型横穴式石室が多くある大和には、存在しないことも注意される。二室塚古墳、交互二室塚古墳は、畿内中枢部の高安古墳群にあって、独自の系譜ともいえる複室構造の石室をもつ点において、当時の政権下にありながら、独自の石室構造を発案できる独自性と、高度な技術を有した被葬者集団のあり方をうかがわせるものである。二室塚古墳の石室は、畿内中枢部の横穴式石室の系譜を考えるうえで、大変重要なものである。さらに、右片袖式の石室を二つ繋げた複室構造としては、全国的にも類例のない貴重なものである。

4. 学史上の二室塚古墳

今回、調査した二室塚古墳には、明治時代に英国人の研究者であるウィリアム・ガウランドが、ガラス乾板による写真撮影を行い、「双室ドルメン」として、海外に紹介したという学史を有する。

ウィリアム・ガウランドは、明治５年（1872年）から明治21年（1888年）まで、大阪造幣寮の技術指導のため、わが国に招聘されたお雇い外国人である。ガウランドは自らの仕事の傍ら、日本各地の古墳の精緻な調査を行い、さらに帰国後も日本の古墳文化についての研究論文をまとめた。その内容は精緻かつ高度なものであり、日本における古墳の科学的研究の基礎を築いたものであることから、「日本考古学の父」ともいわれる(註10・11)。

ガウランドが、二室塚古墳をはじめとする高安古墳群を訪れた時期は不明であるが、明治30年（1897年）に発表された論文「日本のドルメンと埋葬墳」に、「双室ドルメン」が服部川にあるとの記述があり、また計測データも掲載されている。ガウランドは、ドルメンを４つのグループに分け、双室ドルメンは、第４グループとして、「二つのはっきり区別された室のある「ドルメン」とされ、二室塚古墳以外に、「黒田（豊前）に三つ、今市（出雲）のそばに二つ」とされている(註12)。

また、平成３年（1991年）に大英博物館で、ガウランドが撮影した二室塚古墳石室のガラス乾板写真が発見された(註13)。上田宏範氏のご研究によると、この写真は、ガウランドの帰国直前の時期にあたる明治20年（1887年）から明治21年（1888年）に、米国人のロマイン・ヒッチコックとともに調査し、撮影されたものと考えられている。ガウランドに同行した、米国人のロマイン・ヒッチコックもまた、英語教師としてわが国に招聘されたお雇い外国人であったが、日本での米国人による日食観測隊の写真担当を務めるなど、写真技術のエキスパートであり、ガウランドの写真技術も彼による指導があったものと指摘されている(註14)。ロマイン・ヒッチコックの撮影した二室塚古墳の写真（巻頭２下）は明治24年（1819）に発表された論文(註15)に掲載されている。ガウランドとヒッチコックは、それぞれのカメラで石室の写真を撮影したものと考えられている(註16)。彼らの撮影した写真には、きわめて明瞭に120年前頃の二室塚古墳の石室の姿が残されている。

また、明治21年には、地理学者でのちに東京地質学会を創立した山崎直方氏が、人類学者の坪井正五郎氏の依頼を受けて高安古墳群の調査を行っているが、二室塚古墳については、『東京人類学会雑誌』第４巻第33号に、二室塚古墳の石室の図を計測値とともに掲載し、「二室トナル」と記して注目している(註17)。

以上、記したように、二室塚古墳の石室は、ウィリアム・ガウランドが、日本の横穴式石室墳のなかでも、「双室ドルメン」として注目し、さらには、ロマイン・ヒッチコックとともに、写真撮影を行って、いち早く海外に紹介した石室として、また、日本における近代考古学の草創期の古墳研究に取上げられた古墳として、貴重な学史を有する(註18)。

（註１）大阪府教育委員会1966年「八尾市高安古墳群の調査－昭和41年度第1次郡川其他地区調査概要－」『大阪府文化財調査概要1965・66年度』

（註２）高安古墳群と山麓の古墳保存・調査計画検討会議でご指導いただいている白石太一郎氏に、測量調査前の段階で、ご教示いただいた。測量の結果、ご教示いただいたとおり、墳丘の中心点が、前室と後室の間付近にある可能性が高いことが、確認された。

（註３）前掲註１

（註４）二室塚古墳・交互二室塚古墳については、本調査以前に、下記の西森忠幸氏の論文によって、石室略測図の作成等の基礎的な調査がなされ、その特異な構造についての考察が加えられている。

・西森忠幸2003年「横穴式石室の増改築について―河内の二室交互塚古墳をめぐって―」『古代学研究』第162号

・西森忠幸2004年「複室構造を有する横穴式石室墳についての一考察―大阪八尾市二室塚古墳と二室交互塚古墳―」『八尾史跡考古通信』創刊号　八尾市立歴史民俗資料館友の会史跡考古部会

（註５）柳沢一男2003年「複室構造横穴式石室の形成過程―羨道間仕切り型の築造系譜―」『新世紀の考古学―大塚初重先生喜寿記念論文集』大塚初重先生喜寿記念論文集刊行会

（註６）白石太一郎　1966年「畿内の後期大型群集墳に関する一試考―河内高安千塚及び平尾山千塚を中心として－」『古代学研究』第42・43合併号

（註７）山崎信二2003年「横穴式石室構造の地域別比較研究―中・四国編―」『古代瓦と横穴式石室の研究』

（註８）今回、本稿を草するにあたり、河内長野市教育委員会の太田宏明氏に、二室塚古墳の複室構造についての所見をいただいた。さらに、複室構造についてのこれまでの研究について、ご教示をいただいた。

（註９）重藤輝行1999年「北部九州における横穴式石室の展開」『九州における横穴式石室の導入と展開』（第２回九州前方後円墳研究会資料集）第２回九州前方後円墳研究会実行委員会

（註10）ヴィクター・ハリス後藤和雄責任編集　2003年『ガウランド　日本考古学の父』大英博物館・朝日新聞社

（註11）松江信一2002年「高安の「ドルメン」」『郵政考古紀要』31

（註12）上田宏範校注・監修　稲本忠雄訳1981年『日本古墳文化論―ゴーランド考古論集』

（註13）前掲註10

（註14）上田宏範2006年「Ｒ・ヒッチコックの滞日二か年とその業績」「Ｉ評伝　Ｒ・ヒッチコック－来日から帰国まで－」『ロマイン・ヒッチコック－滞日二か年の足跡』社団法人　橿原考古学協会

（註15）ロマイン・ヒッチコック「日本の古墳」1891（合衆国ナショナル・ミュージアム報告書　1892）
澤田麗荘訳　上田宏範　監訳・校注『ロマイン・ヒッチコック－滞日二か年の足跡』社団法人　橿原考古学協会2006年

（註16）前掲註14

（註17）山崎直方1888年「河内高安郡塚穴賓見記事第二」『東京人類学雑誌』第４巻第33号

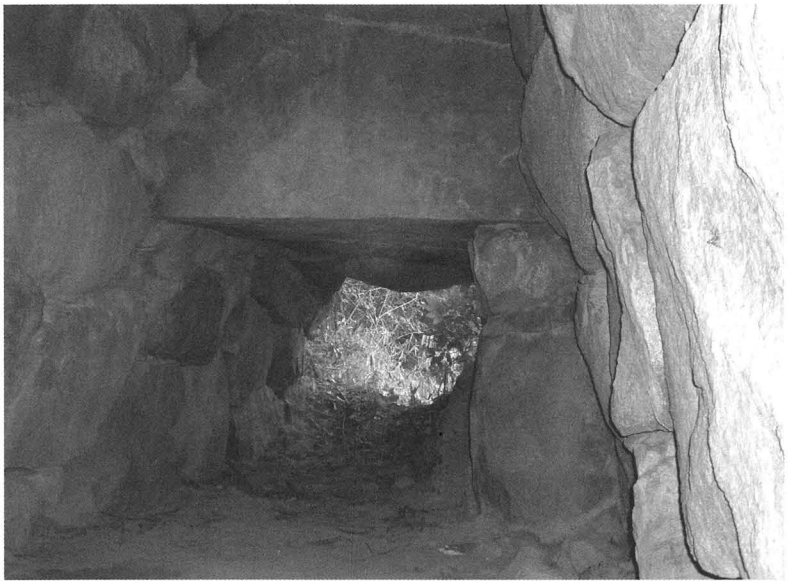
（註18）二室塚古墳をはじめとする学史については、松江信一氏にご教示いただいた。Ｗ・ガウランドとロマイン・ヒッチコック、Ｅ・Ｓ・モースなどの高安古墳群の調査についての学史研究は、氏の下記の論考に詳しい。
松江信一2006年「河内・高安古墳群から見たモース、ガウランドとＲ・ヒッチコック」『ロマイン・ヒッチコック－滞日二か年の足跡』社団法人　橿原考古学協会

報 告 書 抄 録

ふりがな	たかやすこふんぐんぶんぷ・そくりょうちょうさほうこくしょ ―おおくぼ・やまたけみなみちくしょうさいぶんぷちょうさ ししせき・にしつづかこふんそくりょうとうちょうさほか―
書　　名	高安古墳群分布・測量調査報告書　―大窪・山畑南地区詳細分布調査　市史跡・二室塚古墳測量等調査他―
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	八尾市文化財調査報告
シリーズ番号	５６
編著者名	吉田野乃
編集機関	八尾市教育委員会
所 在 地	〒581-0003 大阪府八尾市本町１丁目１番１号　　ＴＥＬ ０７２－９９１－３８８１
発行年月日	西暦２００７年３月３１日

ふりがな	ふりがな	コ　ー　ド	北　緯	東　経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村　遺跡番号	°′″	°′″		(m²)	
たかやすこふんぐん	やおしおおくぼ・やまたけ						
高安古墳群	八尾市大窪・山畑	27212	34 37 25	135 39	20061219～20070307	20000	重要遺跡確認
にしつづかこふん	やおし・はっとりがわ						
二室塚古墳	八尾市服部川	27212	34 37 10	135 39 5	061016～061108		保存目的
所収遺跡名	種　　別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
高安古墳群 大窪・山畑地区 (詳細分布調査)	古墳	古墳時代			須恵器片(表面採集)		既に確認されているものを含め56基の古墳、79地点の古墳状地点を確認。
高安古墳群 二室塚古墳	石室	古墳時代			凝灰岩製石棺材片		二室塚古墳の墳丘範囲・形状等が判明

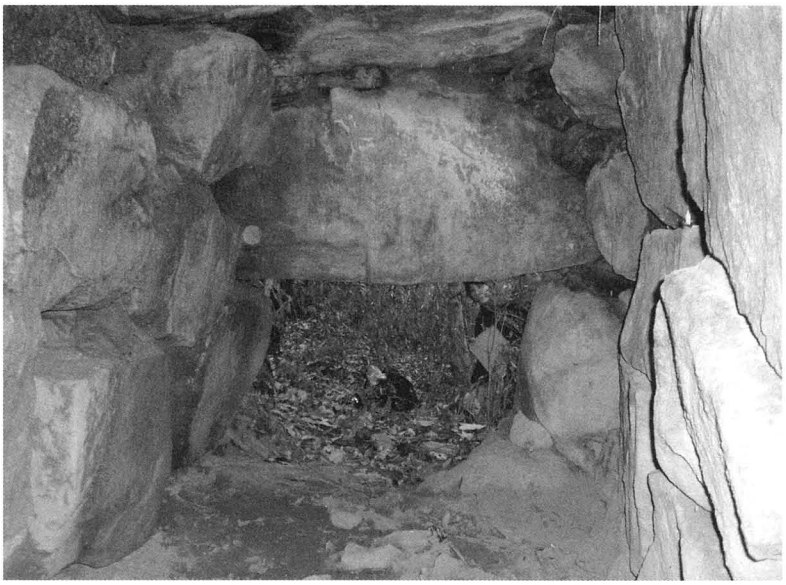
大窪・山畑1号墳　墳丘　東から



大窪・山畑1号墳　玄室から開口方向

大窪・山畑1号墳　奥壁(左が天)

大窪・山畑２号墳　開口部付近



大窪・山畑２号墳　玄室から開口方向

大窪・山畑３号墳　墳丘　南東から

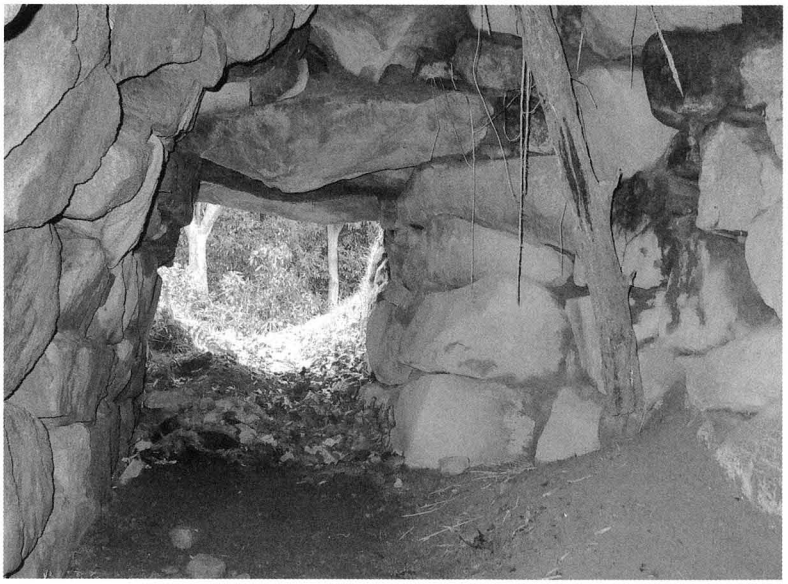
大窪・山畑4号墳　墳丘　南から

大窪・山畑5号墳　墳丘　南から

大窪・山畑5号墳　開口部付近

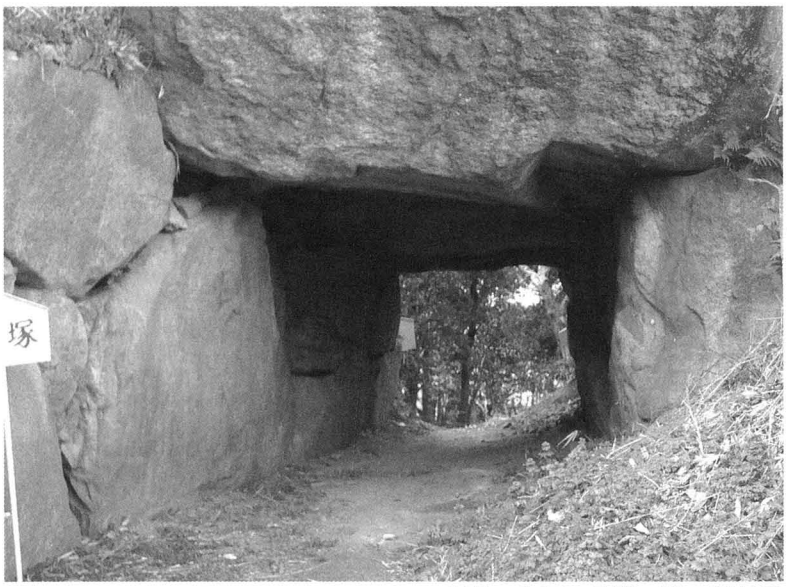
大窪・山畑5号墳　家形石棺　南から

大窪・山畑6号墳　墳丘　南から

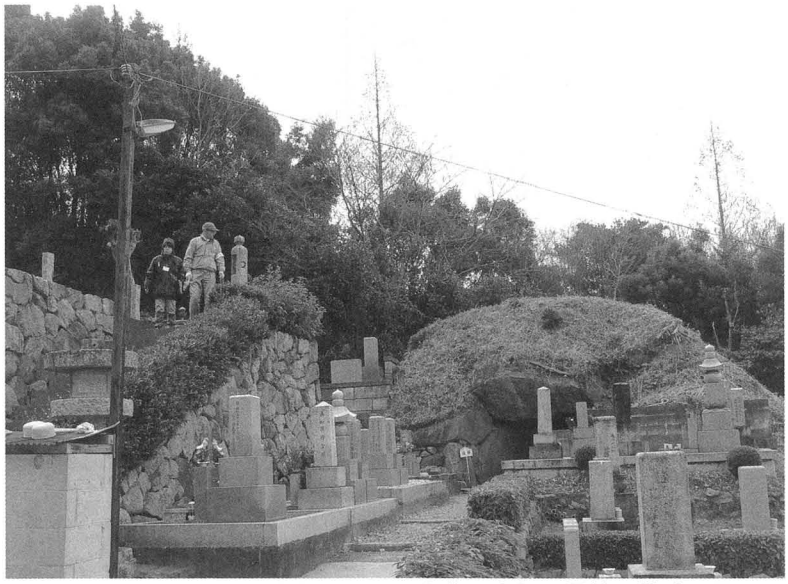


大窪・山畑6号墳　玄室から開口方向

大窪・山畑6号墳　奥壁

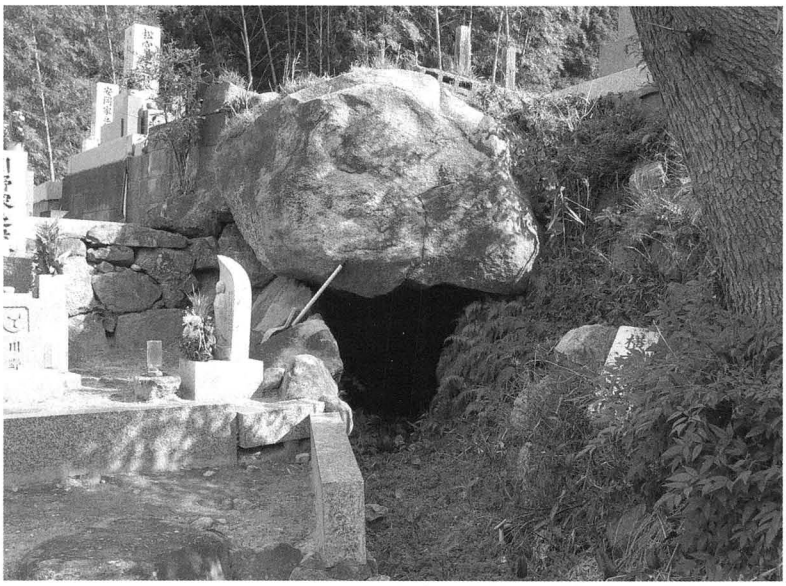


大窪・山畑7号墳　開口部付近



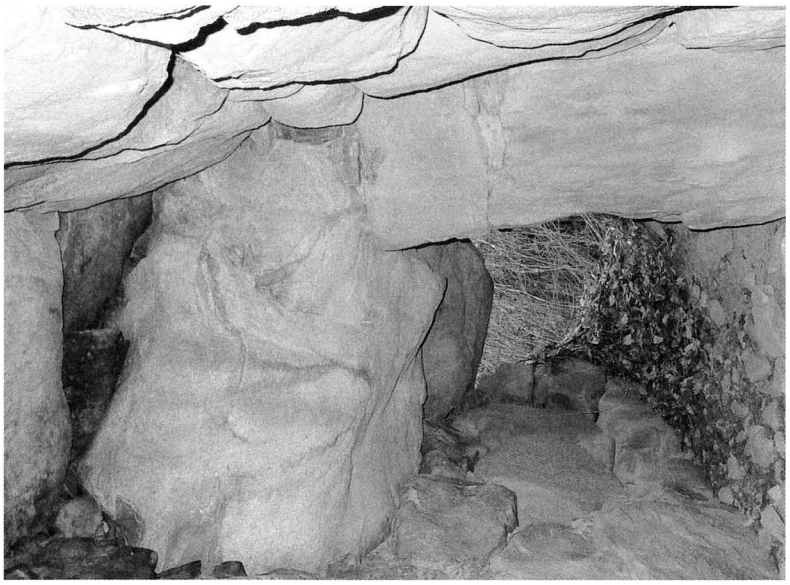
大窪・山畑7号墳　墳丘　北から

大窪・山畑7号墳　遠望　東より

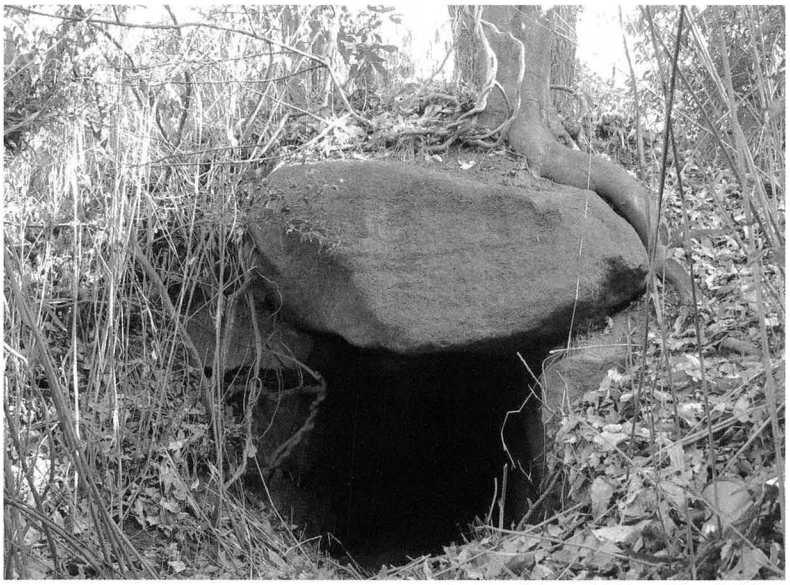


大窪・山畑8号墳　開口部付近より

大窪・山畑8号墳　玄室から開口方向



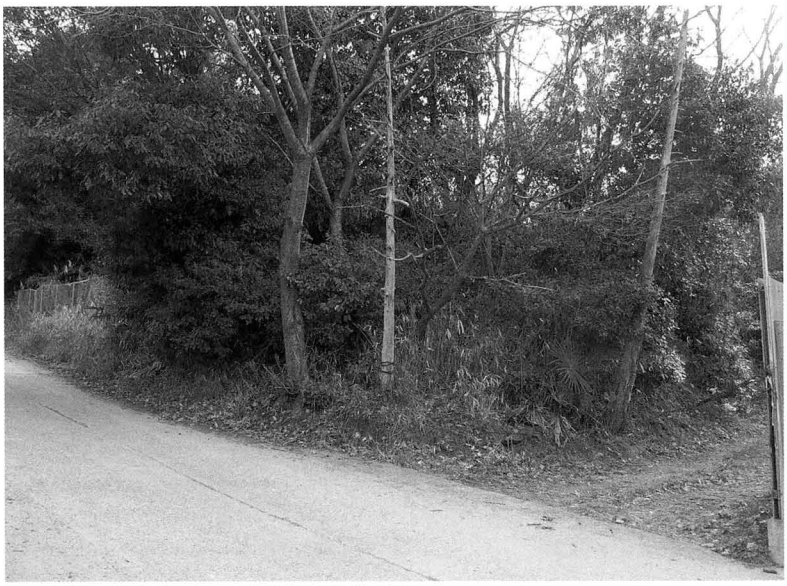
大窪・山畑10号墳　玄室から開口方向（左が天）



大窪・山畑10号墳　開口部付近

大窪・山畑19号墳　墳丘　南西から

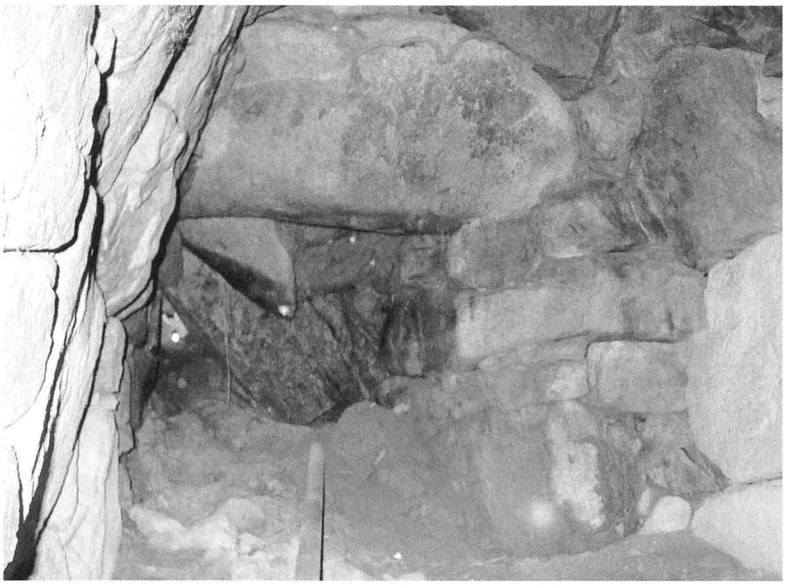
大窪・山畑19号墳　南西側（閉室石か）



大窪・山畑20号墳　墳丘　北西から

大窪・山畑21号墳　奥壁

大窪・山畑21号墳　玄室から開口方向



大窪・山畑22号墳　玄室から開口方向

大窪・山畑22号墳　奥壁

大窪・山畑23号墳　墳丘　南西から

大窪・山畑23号墳　開口部付近

大窪・山畑24号墳　墳丘南から

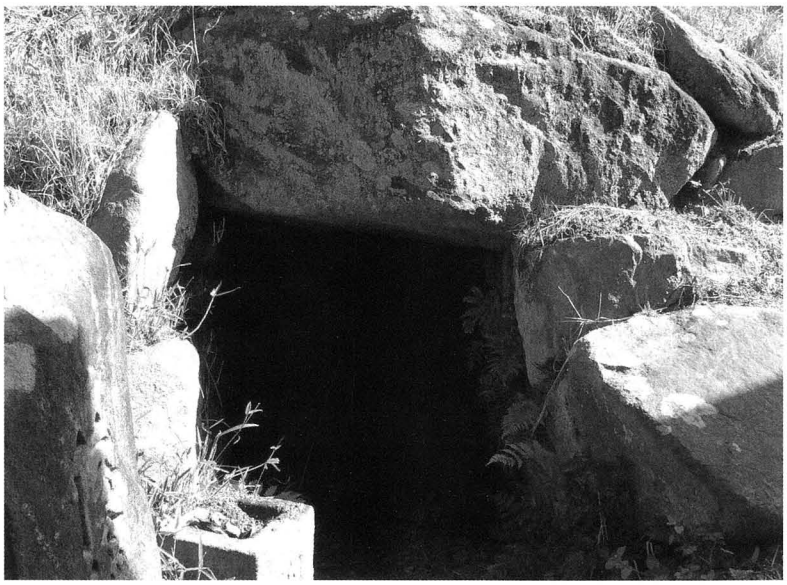
大窪・山畑25号墳　開口部

大窪・山畑25号墳　奥壁（左が天）

大窪・山畑25号墳　玄室から開口方向

大窪・山畑26号墳　開口部

大窪・山畑26号墳　奥壁



大窪・山畑27号墳　開口部

大窪・山畑27号墳　奥壁

大窪・山畑27号墳　玄室から開口方向

大窪・山畑30号墳　墳丘　南から

大窪・山畑30号墳　玄室から開口方向

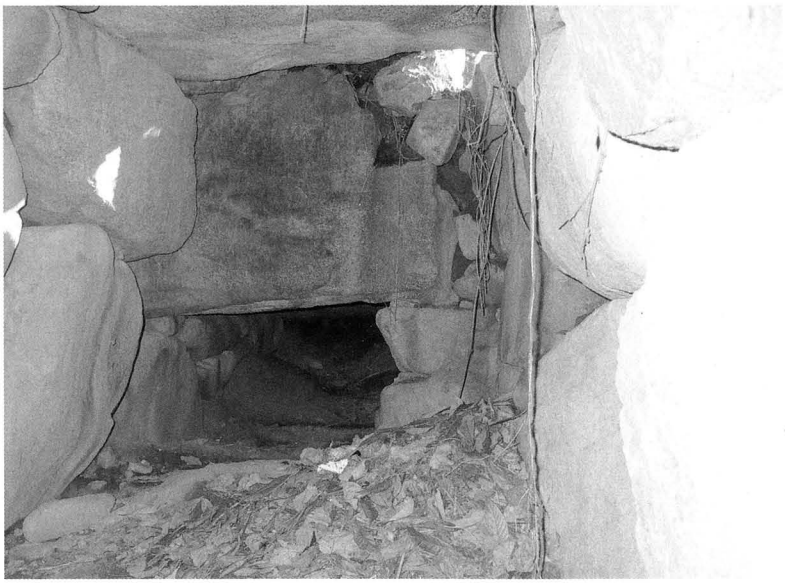
大窪・山畑31号墳　玄室から開口方向

大窪・山畑31号墳　奥壁

大窪・山畑32号墳　南から

大窪・山畑32号墳　奥壁（左が天）

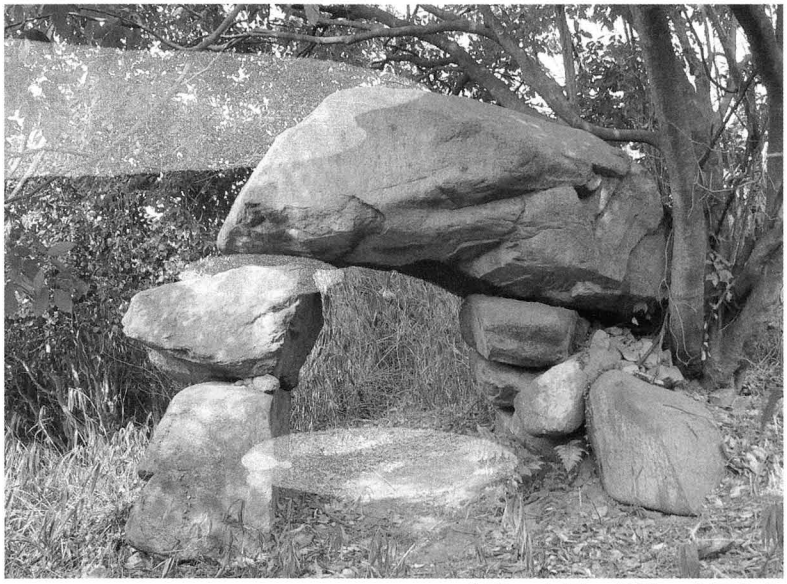
大窪・山畑33号墳　墳丘　南から



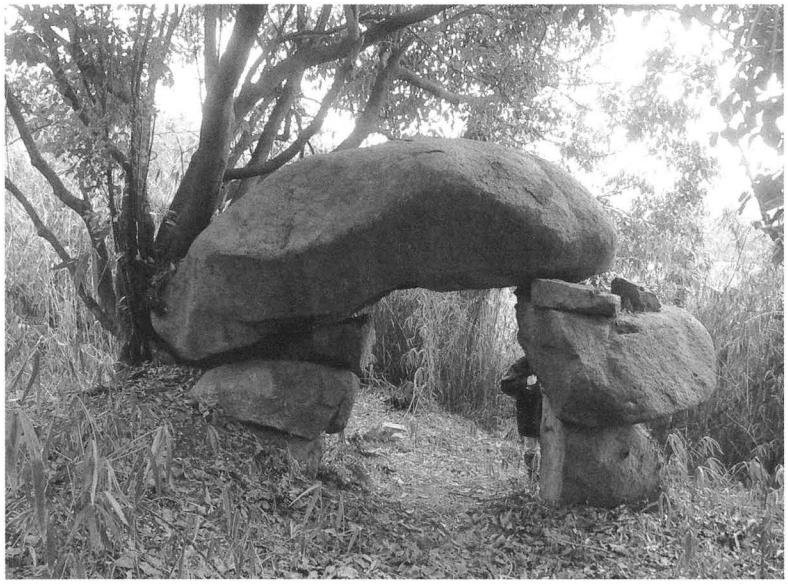
大窪・山畑33号墳　玄室から開口方向

大窪・山畑34号墳　左側壁残存部

大窪・山畑35号墳　左側壁残存部　西より



大窪・山畑36号墳　南西から

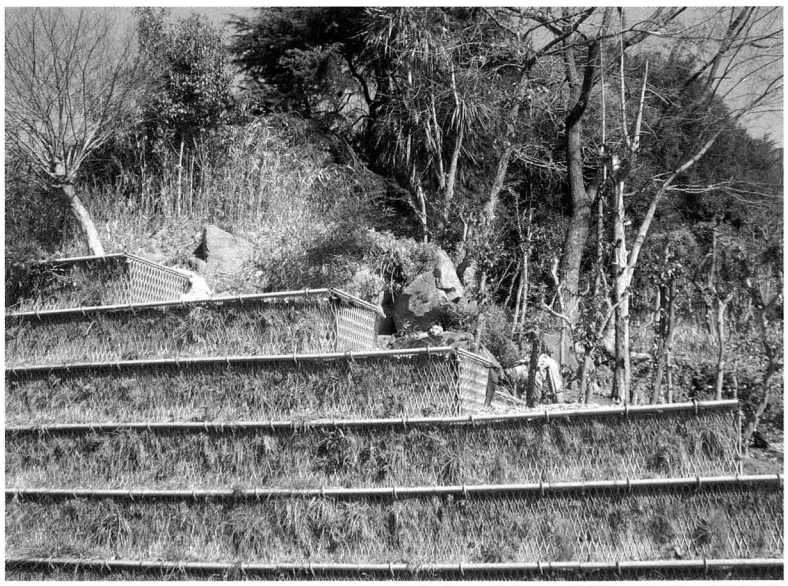


大窪・山畑36号墳　北東から

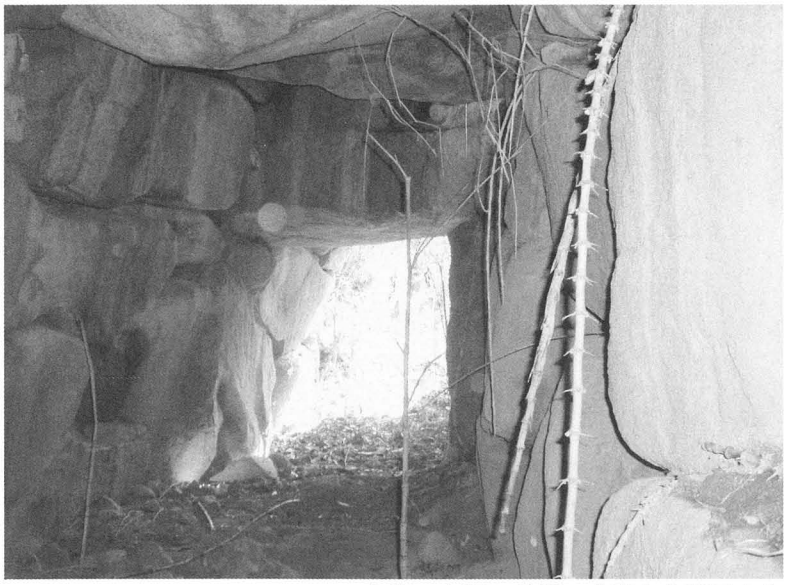
大窪・山畑37号墳　玄室から開口方向

大窪・山畑37号墳　付近　南西から

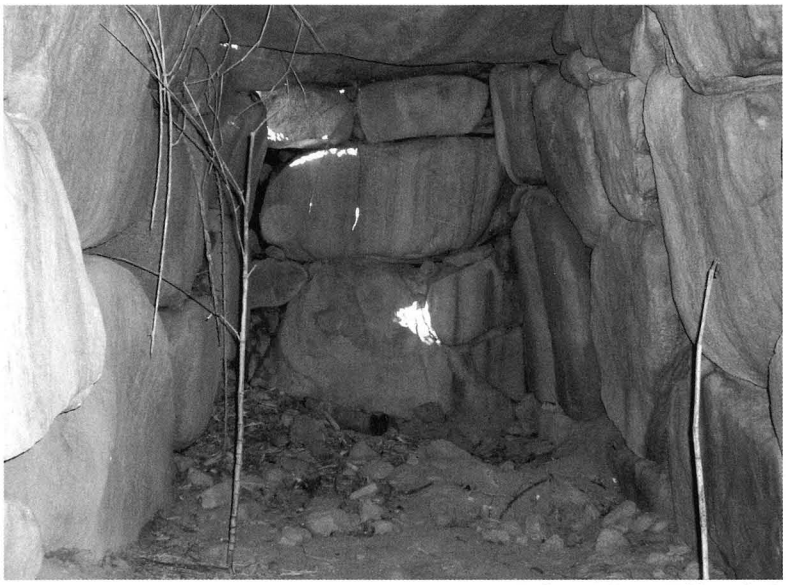
大窪・山畑38号墳　左側壁残存部　西から



大窪・山畑39号墳　墳丘　西より



大窪・山畑39号墳　玄室から開口方向



大窪・山畑39号墳　奥壁

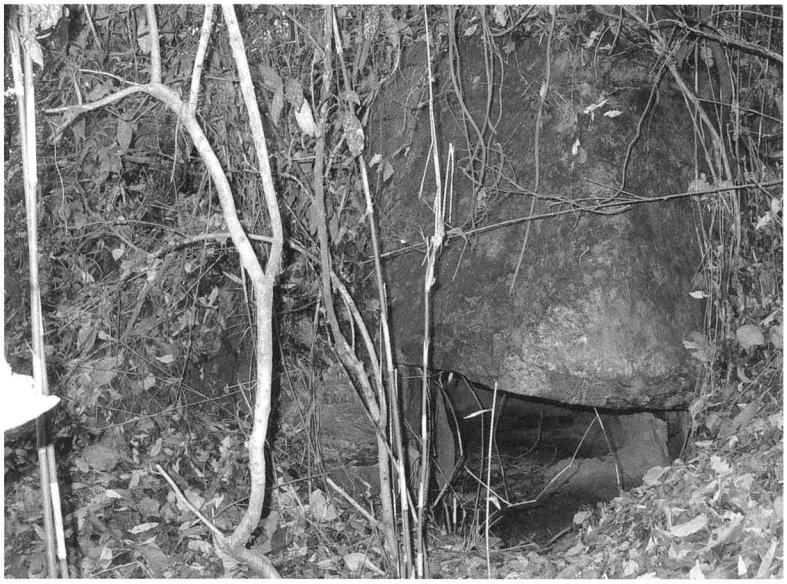
大窪・山畑41号墳　墳丘　北西から

大窪・山畑41号墳　墳丘　西側石室左側壁

大窪・山畑42号墳　墳丘　南から

大窪・山畑43号墳　石室南から

大窪・山畑43号墳　玄室から開口方向



大窪・山畑44号墳　石室開口部付近

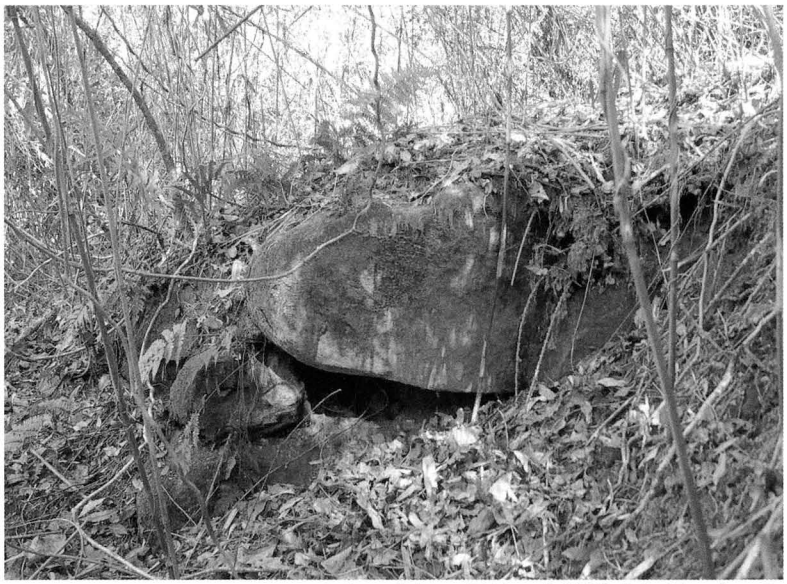
大窪・山畑44号墳　玄室から開口方向

大窪・山畑45号墳　墳丘　南から

大窪・山畑46号墳　南西から

大窪・山畑47号墳　墳丘南から

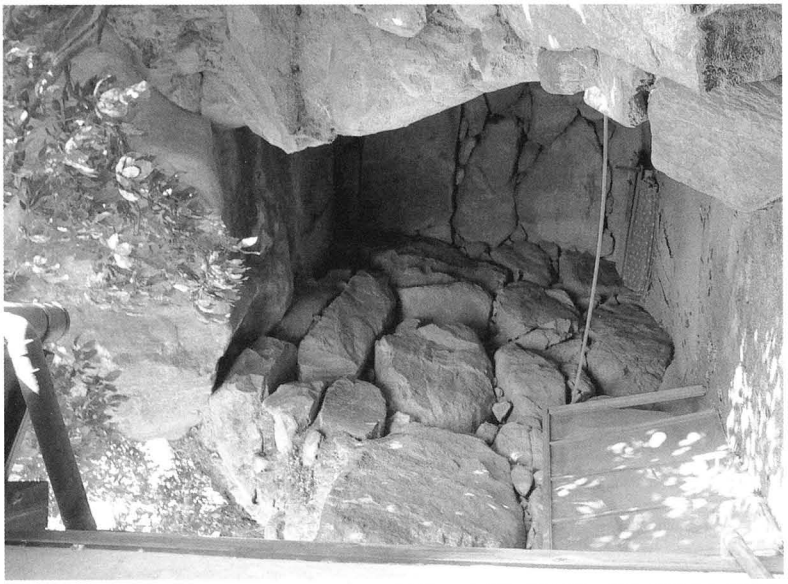
大窪・山畑49号墳　墳丘　南から



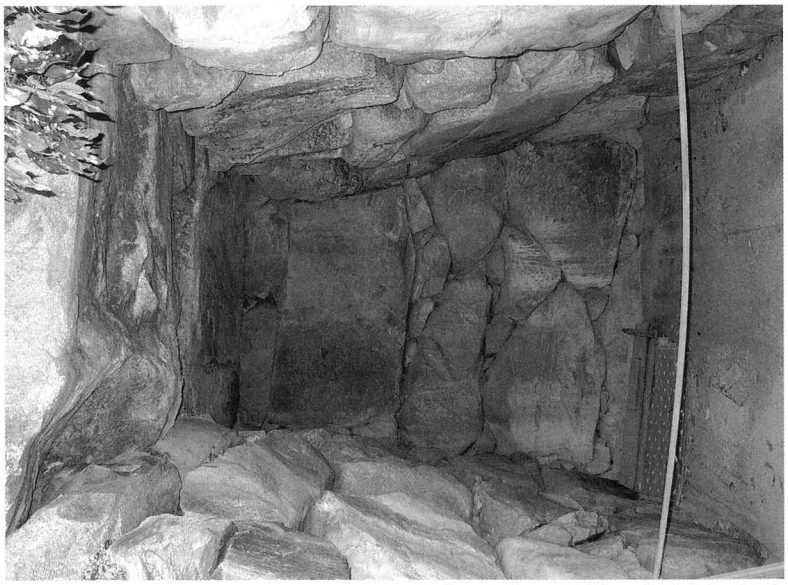
大窪・山畑50号墳　右側壁残存部　南から

大窪・山畑51号墳　墳丘　南西から

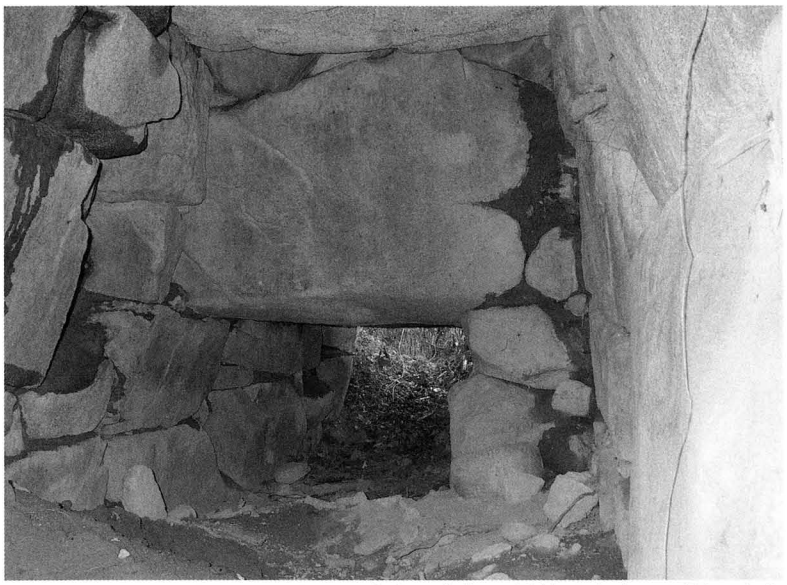
大窪・山畑51号墳　左側壁残存部　南西から



大窪・山畑52号墳　開口部（左が天）



大窪・山畑52号墳　奥壁（左が天）

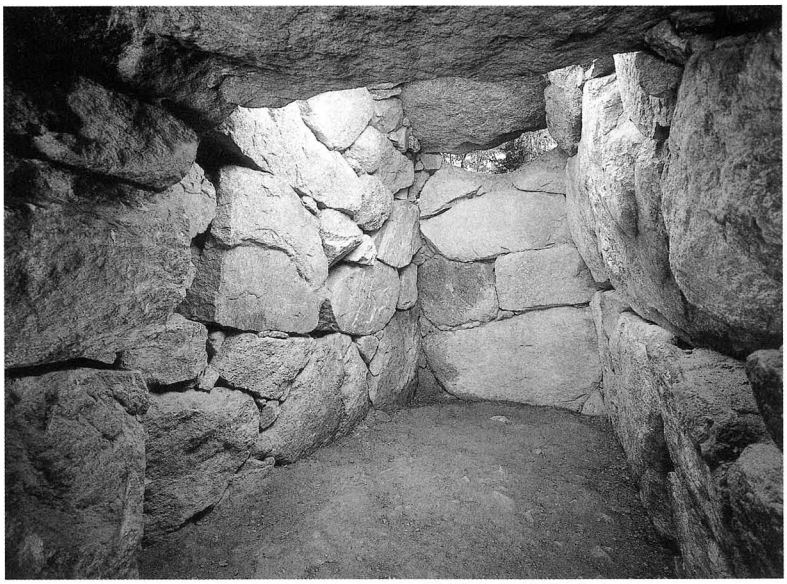


大窪・山畑53号墳　玄室から開口方向

大窪・山畑54号墳　開口部　南から

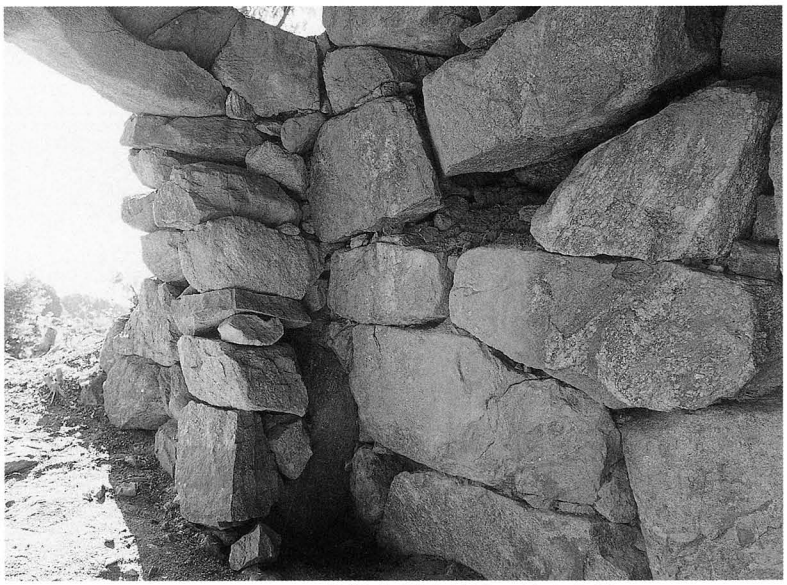
大窪・山畑56号墳　左側壁残存部　西から

図版26　二室塚古墳　石室

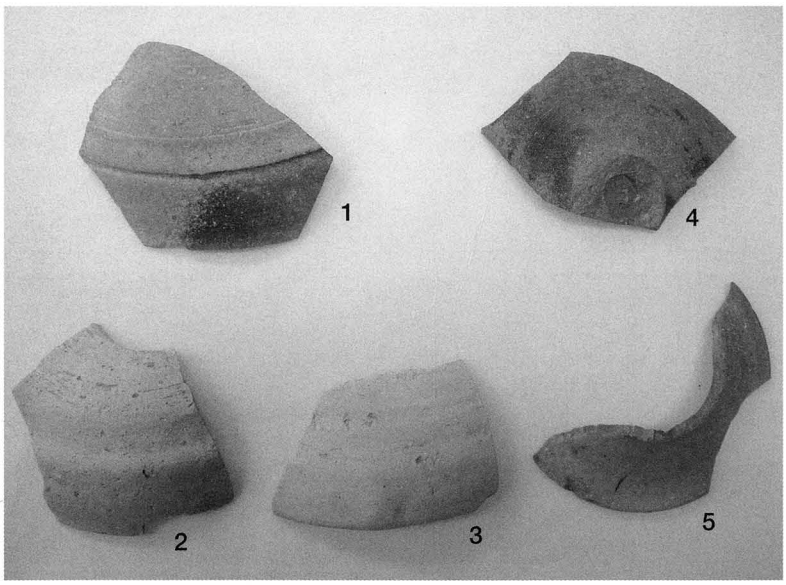


袖部から後室方向（撮影　阿南辰秀 氏）

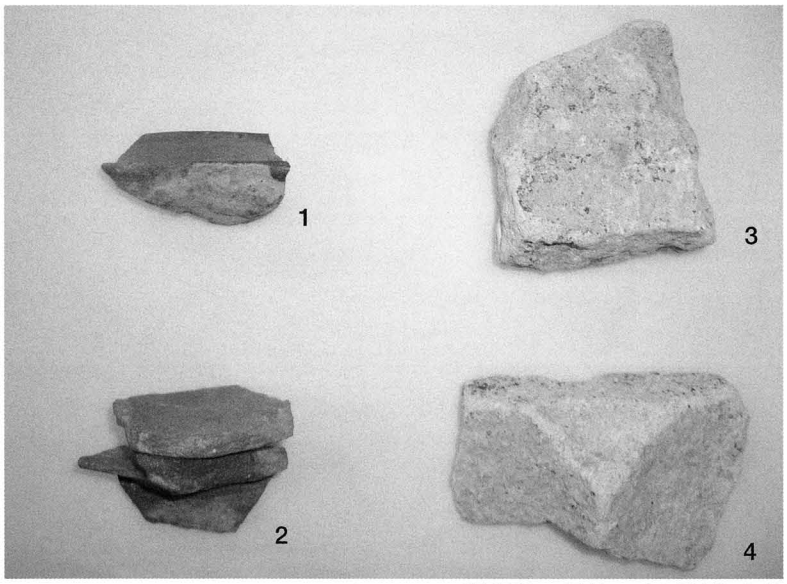
袖部のテラス状部分　前室側より（撮影　阿南辰秀 氏）



羨道右側壁付近　前室より（撮影　阿南辰秀 氏）



大窪・山畑21号墳　表面採集遺物



服部川54号墳　表面採集遺物

二室塚古墳　表面採集石棺材

八尾市文化財報告５６　平成１８年度国庫補助　高安古墳群等調査事業

高安古墳群　分布・測量調査報告書

―大窪・山畑南地区詳細分布調査　市史跡二室塚古墳測量等調査他―

発行年　２００７年３月
発　行　八尾市教育委員会
　　八尾市本町１丁目１番１号
編　集　生涯学習部　文化財課
印　刷　古賀印刷株式会社

〔八尾市刊行物番号　H18―142〕